毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵税共五十錢）

編輯兼發行人　香山清和
發行所　市田上縣野長　學校會　門專絲蠶田上千曲
印刷所　町隈市田上縣野長　中澤印刷所

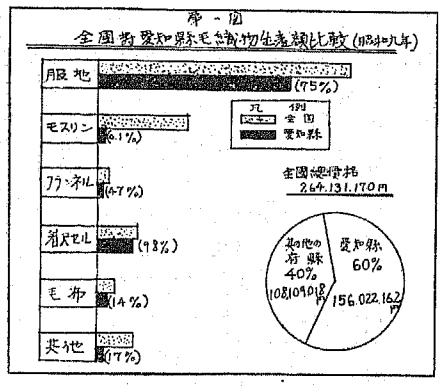
山本三六郎著
化學純絹絲の工業的完成　¥2.30
蠶絲科學研究會編
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其現況　¥1.50
菅原勇治著
改正蠶絲業法規要論　¥0.30
市田上縣野長
發行所　蠶絲科學研究會
〔振替長野6413番〕

愛知縣の毛織物

藤井爲五郎

平均して日本全國民一人當り約三ポンド半の毛織物乃至綿物を身につけて居り、毛織物の全國に於ける最大生産高は昭和九年末に於て二六四、一三一、一七〇圓にして、愛知縣に於ける其れは、一五六、〇二二、一六二圓にて全國の六〇%を占め、其内服地、セルに於ては全國の殆んど全部と言つて過言でない程生産されてゐる。即ち服地は價格に於て七五%、數量に於て全國の八一%の驚くべき狀態にある。第一圖は全國との對比を圖示す。

第一圖



第一表は、毛織工業に於ける機場數、機台數、織工數につき示す。

之等毛織物は名古屋、一宮、兩市及び津島町附近に産する。第二圖は産地略圖及羊毛紡績工場、毛織物整理工場の所在を示すものである。

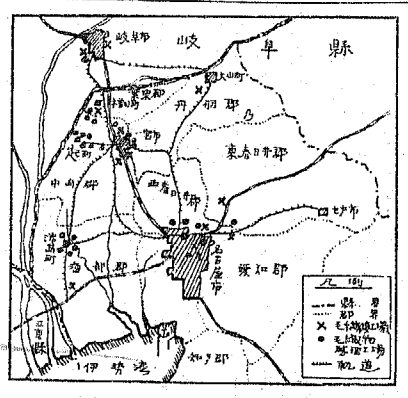
毛織工業の發展の理由として

一、氣候地勢が適してゐる事
一、業者の不屈の熱心なる研究
一、商業に秀ひでゝゐる事
一、試驗場等の指導機關の完備

第一表

全國	愛知縣	百分比(%)
機場數 一、三六六	九四四	六六
機台數(力織機) 六四三	一四、三三	三五
全（手織機） 七九	一四〇	一八
織工數(男) 九、〇七七	三、九四四	四三
(女) 三五、一六〇	一五、〇七三	三〇
計 四四、三三七	一八、一六六	四〇

第二圖



一、縣營檢査所の設立により品質の向上

の諸點を擧げる事が出來やう。

左に毛織物檢査所の大体を述べる。

毛織物檢査所は昭和五年十二月設立を見、本所を愛知縣廳に、支所を名古屋、一宮、津島の三箇所に設け、各整理工場に檢査場を設け、其數二七、職員二百名である。

愛知縣に於て製織される八十八糎以上の毛織物（毛織物と稱するは經緯の絲數三分の一以上の毛絲を使用せるもの）は受檢せねばならぬ事になつて居る。但しコールに限つて六十八糎以上のものは檢査を必要とする事になつてゐる。又製織直後の生地を縣外に移出する場合未整理品として檢査せねばならぬ。

整理品は左の三種に區別して檢査を行ふ

第一種、男子服地の類にして「かり毛絲」以外の純毛絲を總絲數の三分の二以上使用したもの

第二種、婦人服地、帽子地、窓掛地、裏地、輸出向色物の類

第三種、前二項以外のもの

檢査内容は次の通りである。

一、原絲及其の加工

原絲及び原絲の加工不良なものは不合格となる。

二、組織及製織

織物の組織が著しく緊密を缺いたり又均衡を得てゐないものや、均等でないもの、其他製織の著しく惡いものは不合格となる。

三、密度

密度について標準規格表に滿たないものは不合格となる。

四、長さ及幅

長さ及幅は檢反機にかけて各反毎に檢査をするが密度、耐アルカリ、耐酸、强力、收縮については同色同柄の六本に一本の割合の拔取檢査を行ふ。

第一種　一四二糎　但しコールは七四糎
第二種　一四〇糎　アルパカ裏地及び一三七糎　カーテン地は九一糎
第三種　一四二糎　但しコールは七四糎

右の幅に達しない時は不合格となる。

五、强力

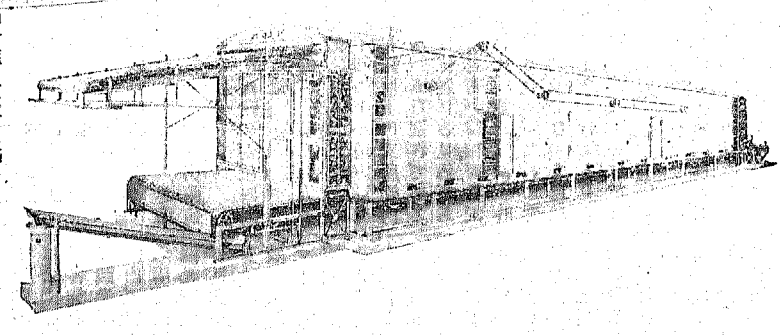
梳毛絲を使用せるものは强力試驗を行はないが、紡毛絲を使用せるものには密度檢査を行はず强力試驗を行ふ。又子服、婦人服にて飾撚絲を主体として用ひあるものも又强力檢査を行ふものである。

然して次の第二表の規格に達しないものは不合格となる。

第二表

區別	目付	經	緯
薄地	（一平方米の目方三六瓦以下）	一〇、〇瓩	九、〇瓩
中肉地	同 四六瓦以下）	一三、五〃	一〇、五〃
厚地	（同 四九六瓦以下）	一五、〇〃	一二、〇〃
中厚地	（同 五六瓦以下）	一七、五〃	一三、五〃
極厚地	（同 五六瓦以上）	二〇、〇〃	一五、〇〃

現代乾繭機界ノ王座
大和式自動輸送乾繭機
二五九六年代表型
【各種型錄贈呈】



營業課目
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動人絹乾燥機
特許帶川三光式乾燥裝置
特許やますホイロ
特許サンケー式濾過淨水裝置
特許サンケー式廢湯吸熱器
特許サンケー式高壓ポンプ
特許サンケー式トラップ
製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

經緯各幅五糎、長さ十糎の試片を松村式强力試驗機により檢査を行ふ。

六、耐酸試驗（汗に對する試驗）

氷醋酸一〇％の液中にて第一種、第三種及第二種中の紺黑物は攝氏八十度にて十分間、第二種は攝氏六十度にて十分間處理す。脫色、變色甚だしいものは不合格となる。

七、耐アルカリ試驗（洗濯に對する試驗）

マルセリ石鹸三％、結晶炭酸ソーダ二％の液中にて、第一種、第三種及第二種中の紺黑物は攝氏八十度にて十分間、第二種は攝氏六十度にて十分間處理して脫色、變色甚だしいものは不合格となる。

八、褪色試驗

アクメ褪色試驗器にて第一種、第三種及第二種中の紺黑物は五時間、第二種は三時間の照射により試驗を行ふ。

九、收縮試驗

試驗片（方二十糎）を浸透劑を含める水中に入れ脫水、アイロン乾燥後、原長に對して經又は緯が收縮率三％を越へるものは不合格となる。但し第二種に於ては經緯何れか一方五％迄は許されてゐる。

十、糊

糊は第一種にあれば不合格で、第二種第三種は二％迄許され、それ以上糊を有してゐれば不合格となる。

其他織段、絲拔、掬ひ、ネップ、汚、穴等織物の檢反中發見された疵は織物の耳に綿絲で表示し一見して疵の個所が譯る筈である。其の疵即ち表示された數が第一種にあつては十米に一個の割合を超過した場合は不合格となる。第二、第三種にては六米に一個超過した時は不合格となる。

右の樣にして織物の合格、不合格を決定し、夫々合格、不合格のマークが兩端未に押捺され耳には二米毎に耳マークが押捺されてゐる。從つて三米即ち一着分に截斷されても合格の品には一個は必ず耳マークが付いてゐる故洋服屋で注意すれば譯る。即ち不合格には耳マークが押捺されてゐない。だが往々にして民間の手で抹消されてある場合がある。勿論縣法規の違反ではあるが。

（附記）　愛知縣毛織物檢査所には開設以來の大谷隼人氏を始めとし、上田出十六名の大多數に上り又大阪府毛織物檢査所も愛知縣と殆んど同樣の檢査法にて吉田氏が在勤せられる事を附記して置く。

上田便り

上田染織講習所試驗場に昇格　多年地元の要望であつた長野縣染織講習所の試驗場昇格は漸く希望を達せられ四月一日より長野縣染織試驗場と改名される事となり同時に市より寄附の一千坪の敷地に染織工場を擴張し縣下當業者の指導に乘り出す事となつた。

岡谷市の誕生　人口四万一千を有する製絲工業都市平野村字岡谷は四月一日附を以つて市制施行岡谷市となつた。

原蠶種の種類　蠶試上田支場四月十日現在原蠶種の申込は十八万五千百二十八蛾で昨年に較べ三万蛾の激增である。その主なる品種を擧げると

支一〇七	三万九百四十八蛾
日一一一	三万九千七百四十蛾
奥一九	二万三百三十三蛾
日八	三千八百五十二蛾
支一七	一万九千九十蛾
安泰	二万八千六十五蛾

で昨年王座を占めてゐた安泰は第三位に落ち日一一〇、支一〇六、歐一八は全く影を潜めその代りに日一一一、支一〇七が斷然增加し原蠶種國家管理法案の實地期を控えて國產優良品種の進出は注目されてゐる。

此の申込に對し同支場では配布原種廿二万蛾を豫定して、本年度原蠶種掃立を三千七百四千蛾と決定したがその內容は次の如くである。

一化性	日八、支一六、支一七、歐一六	一二五〇〇〇蛾
	歐一八、歐一九	六八〇五〇〇〇蛾
二化性	日一一一、支一〇五、支一〇七	三一六〇六〇〇〇蛾
	尙掃立は昨年より二、三日遲れて十四、五日頃である。	六二九〇〇〇蛾

上中に補習科閉設　專ら上級學校入學準備を目的とし國、漢、英、數の重要學科のみを敎授せんとする豫備校、上田中學校の補習科は四月十三日午後八時開校式を擧行十四日より明年一月廿一日まで開講される事となつたが申込者は縣下中等學校卒業生等四十六名に達し學則其他は本科に準據、襟章も日の新文字を輝かし授業料は月二圓五十錢である。

遞信機飛來　遞信省依托飛行士昇格試驗飛行の爲め四月十四日二機、十五日五機が上田飛行場に飛來した。

桑園の雪害　上小地方桑園の雪害調査は四月十五日蠶取上田支所で取纒めた結果管內桑園七千九百町歩の內四千六百町歩に達し二十％の減收で被害價格は桑葉十七万七千圓と之に伴ふ繭の減收四十一万九千圓（一貫匁四圓五十錢換算）の合計五十九万六千圓と見積られ春蠶用桑園は慘狀を呈してゐる。

朝のサイレン五時　上田市役所の朝のサイレンは四月十五日から九月末日迄一時間繰上げ午前五時に鳴らす。

夜市開始　四月十六日から夜市が開始された。六の日馬場町、七の日大門町、八の日原町、九の日鈴蘭通、十の日海野町である。

蠶種一割增產　逐年減產の一途を辿り本年も減產を豫想されてゐた上小地方蠶種製造高は四月十六日蠶取上田支所の見込調査に依ると左の如く意外にも一割增產を豫想されるに到つたが之は管內全般に行はれる時代順應統制企業形態共同蠶種配給組合に大量取引の結果を見越したものである。

上田市	
原蠶種	一二五〇〇〇蛾
普通蠶種	六八〇五〇〇〇蛾
小縣郡	
原蠶種	六〇六〇〇〇蛾
普通蠶種	三一六二九〇〇〇蛾

之を同所管內蠶種家數に見ると十年度に比し小縣に於て十四戸を減じ上田五一戸小縣三二四戸となつた。此の製造額が增加し蠶種家の數の減少せるは優良品種の共同生產を目指す中小蠶種家の合同經營化の歩みを示すものである。

市內銀行利下　上田市組合銀行安田、八十二、信濃の三行は政府の低金利政策に追從東京、大阪各地の利下に順應して四月二十日より長野市、松本市同樣定期預金は甲四厘下げ乙五厘下げ當座及特別當座預金は甲乙共各一厘利下を實地する事になつたが改正利率左の如し。

△定期預金甲年利三分四厘以下乙三分七厘以下△當座預金甲日歩二厘以下乙三厘以下△特別當座甲日歩五厘以下乙六厘以下

國道バス時間改正　上田、小諸間の國道バスは從來の三十分毎發車を增發し四月二十一日より二十分乃至三十分毎に發車する事に改正した。上田驛發車時間割左の如し。

午前		午後	
六、三〇		一、三〇	
七、二〇		二、〇〇	
七、四〇		二、三〇	
八、〇〇		三、〇〇	
八、二〇		三、二〇	
八、四〇		三、四〇	
九、〇〇		四、〇〇	
九、二〇		四、二〇	
九、四〇		四、四〇	
一〇、〇〇		五、〇〇	
一〇、三〇		五、三〇	
一一、〇〇		六、〇〇	
一一、三〇		六、三〇	
午後		七、〇〇	
一、〇〇		七、三〇	
一、三〇			

蠶繭取引豫想　上田繭絲商組合總會は四月廿五日上田公園富貴に開催したが席上出席百十二名に依つて今春初取引繭値豫想投票を行ひ左の如く發表した。

△沼津（黃）　高値六圓八八錢、安値四圓二一錢、買馴五圓二八錢

△上田　高値七圓八〇錢、安値三圓九五錢、買馴五圓三七錢

掃立增加豫想　本年初の上小地方蠶況調査—四月廿五日現在蠶取上田支所管內春蠶桑葉は例年より四、五日遲れてあるが先行掃立は一、二日位遲れる見込である。桑收葉量は今冬の雪害野鼠被害桑園整理改殖等に依り平年比一割五分減、昨年比一割減程度と觀測されるがこれに伴ふ掃立は繭價の好調が刺戟となつて比較多量となり昨年より若干少い程度と見られるので特に桑葉繁茂を盡さゞるに於ては桑不足を招くものと大に警戒してゐる。

花便り　本年の櫻花は上田公園は四月廿八、九日頃が見頃であつたが廿八日現在各地の花便りを示すと次の如し。

△上田溫電調査

別所溫泉（五分咲）川邊村長池（五分咲）丸子公園（七分咲）依田村岩谷堂（七分咲）殿城矢澤公園（咲初め）　上田公園（見頃）

△長野運事調査

小諸懷古園（五分咲）上田城址（八分咲）姥捨大雲寺（六分咲）稻荷山治田公園（七分咲）篠之井岡田川堤（六分咲）松代海津城址（七分咲）長野城山公園（八分咲）飯山城址（一分咲）淺間溫泉神宮寺（八分咲）上諏訪高島公園（一分咲）下諏訪水月園（三分咲）高遠城址（九分咲）

觀光祭　鐵道省國際觀光局開設を記念する四月廿四日の全國觀光祭に際し上田市觀光協會は招魂祭の四月廿二日から五月一日迄を觀光祭の期間とし次の如き種々なる催物を行つた。

先づ廿二、三、四の三日間商工會議所樓上に於て觀光資料展覽會、料理菓子展示會、地方特產品即賣會を開き尙同所に附近名所スタンプ二百餘種を備へ押捺に應ぜしめた。

廿二日は招魂祉祭で上小軍人分會の武術大會があり同夜は松平神社宵祭で坂城上田藝妓の餘興引續いて廿三日は公園で上田別所の藝妓總出演の手踊り、廿四日は公園銅像前廣場で有力者觀光協會役員接客業者を招待、藝妓、女給等總動員して觀光祭典と園遊會があつた。同夜は公園內で野外觀光映畫會を開催した。廿五六兩日は演藝館に於てカフエー祭を開き觀光音頭其他女給連の餘興があつた。此の期間中は觀光レコードを掛け觀光提灯をカフエー、骨屋、料理屋等に吊し藝娼妓、女給、女中さんに至る迄何れも觀光マークを附け上田實業組合有志は觀光祭祝賀大篝火を行ひ廿二、三兩日は上田驛、上田東驛、川原柳驛前に於て紙旗二万本を配付し興を副へた。一方上田驛でも期間中櫻花を以て飾付け廿七、八日はスピカーで觀光音頭を放送した。尙公園には十二日よりポンポリ百數十個を點じ趣向を添へた。又上田煙草小賣人組合では觀光祭に因み煙草祭を擧行マーク貼布の煙草持參者に廿六日から三日間電氣館に入場無料とした。更に廿九日は溫電主催で別所溫泉に櫻祭が催された。

菅平の來場二万　昨年十二月以降本年三月末日迄上田溫電々車輸送菅平スキーヤーは東京方面八、五〇一人、名古屋方面一、〇一八人、大阪方面一、三六四人其他五、三六六人、計一六、二四九人で昨年に比し三、四六九人の增加でハイヤー及び須坂口登山者も合すれば優に二万は突破する躍進振りである。

五月から六月の……

上信高原と上田附近の溫泉

△上信高原……

菅平と新鹿澤溫泉

……高原の春と初夏は殆んど同時に來る。谷間の日陰に未だ雪の消えやらぬ內に山櫻と新綠が始まる五月の中旬をすぎる頃落葉松の若葉が萠え初めた間に點々と薄桃色の山櫻が見られ之れが一層新綠を晴々としたものにする。

六月に入ると月の女神の泪等と物思ふ頃の乙女等の感傷をそゝる鈴蘭が咲き初める。中旬がその盛り高原一帶は無數の鈴蘭の花と香りに息づまる樣である。

その頃又高原特有の眞紅の鬼つゝじが赤の豪華版を展開し國寶的な景觀を現出する。

◇

戀の鈴らん　思を秘めて
樣とわらびの　取りくらべ

◇

牧場六里にや　つゝじが燃ゆる
燃えて身をやく　放れ駒
（新鹿澤溫泉小唄）

△長閑な上田附近の溫泉

……田澤、沓掛、別所の三溫泉とも輝やかしい若葉に包まれて、葉蔭を漏れる陽炎が浴槽の中にチラくとゆれてゐる。

湯の中に身を伸びくとつけてると窓近くの樹上に深山がらすや老鶯の歌ふのが聽へて來る。

長閑にも又和やかな初夏の風景…

◇

青葉若葉の別所の里は
深山がらすをお湯できく
（別所小唄）

母校ニユース

新刊紹介　母校教授井上博士は四月一日發行にて最新蠶絲業講座第五卷『人造絹絲の話』と云ふ著書を東京市日本橋區通三丁目一番地成美堂書店より刊行された。定價金壹圓、送料八錢、四六判布製一八八頁である。著書は最も古くよりの人造絹絲研究者である。人造絹絲を詳細に涉つて記載するには餘りに小さい著書であるが人造絹絲の何物であるかを知らんとする讀者の爲めには好適である。會員諸氏の一讀を奬む。

纖維工業學會總會及講演會　四月四日午後二時より東京市新橋驛前藏前工業會館に於て纖維工業學會總會開催され母校よりは野口助教授出席した。總會後同所に於て講演會次いで懇親會があつた。

日本蠶絲學會學術講演會　四月四日、五日兩日東京市麴町區有樂町蠶絲會館に於て日本蠶絲學會學術講演會が開催されたが同學會に於て發表された研究の內母校關係は左の如くである。

一、桑樹品種と纖維素含量に就て　茨城蠶試　中曾根長男
一、家蠶の化性に關する研究
　　蠶卵のリパーゼ作用とアミラーゼ作用の相關に就て（豫報）　上田蠶專　佐藤春太郎
一、赤殭菌が蟋蛆蛹に寄生する場合の環境に就て　埼玉蠶試　眞木　元
一、蠶蛾の軟化病に關する細菌學的研究　長野蠶試　勝又　藤夫
一、荷重時間の生絲に及ぼす影響　上田蠶專　窪田　潤
一、標準添緒回數の決定方法に就て　上田蠶專　林　貞三　鷹野　誠一
一、絹フイブロイン成分の性質（一）　上田蠶專　金子　英雄　小松忠一郎
一、原料絲と其の合撚絲との强伸度に就て　商工絹試　井野　正夫

宣誓式及新入式　新入生の宣誓式は四月十一日午前九時より會議室に於て學校長、教務課長、生徒主事、各科長出席し行はれた。新入式は十二日が日曜なので十三日午前八時より講堂に於て行ひ學校長の訓辭、上級生總代矢崎勝君（紡三）の歡迎の辭、新入生總代近藤士郎君（紡一）の答辭があつて二時間目より第一學期の授業に移つた。中學校の服に眞新しい母校徽章入の帽子をかぶつた新入生の格好は一寸おかしいものである。新入生氏名は別記の通りである。

崎山正克氏（絲二二）榮轉　母校卒業後滿一年製絲科に在つて學校の仕事の傍ら二十五周年記念の千曲會會計事務の大役を引受けられ大變御骨折下さつた同氏は今回和歌山縣繭檢定所に榮轉せられる事になり四月十四日赴任された。

池內眞吾氏御榮轉　養蠶科昆蟲研究室勤務の池內眞吾副手（蠶十九回）は四月十四日屋代高等女學校教諭として榮轉された。

井上博士放送　母校井上教授は四月十五日午後七時三十分より三十分に亘り『蠶絲業の新しき方面』と題する講演を長野放送局より放送した。

養蠶科新任副手　本年度養蠶科新卒の關博夫氏は生理實驗室蒲生教授の下に又同香山護氏は圃場倉澤教授の下に夫々副手として勤務されることゝなり四月十六日附を以て發令された。

枇杷木瀧雄氏御榮轉　養蠶科生理學實驗室蒲生教授のもとに勤務されて居た枇杷木瀧雄副手（蠶十九回）は今回東京中野農林省蠶業試驗場に御榮轉勝木博士の實驗室に勤務される事となり去る四月十七日赴任された。

小泉講師の新任　先般退職せられし早川教授の後任として上田中學校に勤務せらるゝ小泉所氏が四月廿一日附を以て講師として勤務せらるゝ事となつた。同氏は小縣郡泉田村の出身大正十二年上田中學校卒松本高校を經て京都帝國大學經濟學部に學び昭和八年卒大學院に入學同十一年迄在學せられた當年廿一才の新進氣鋭の經濟學士である。因に母校養蠶科第十二回卒現臺北帝國大學助教授理學博士小泉清明氏は同氏の令兄に當る。

正副總代任命　第一學期の正副總代は四月二十一日附を以て左の如く任命された。

	正總代	副總代
蠶三	望月　藤夫	多田　忠正
蠶二	若林　康弘	市原　政治
蠶一	長末　方夫	齋藤　重利
絲三	叶澤　弘	西原　美登
絲二	阿部　豊	金藤　正治
絲一	佐藤　忠富	山岸琢治郎
紡三	矢崎　勝	矢澤　登
紡二	柳澤　柳二	福永　雄三
紡一	近藤　士郎	林　正信
教二	飯森としゑ	柳澤ときわ
教一	中村　泰子	荻上登志子

談話會例會　談話會の第一學期幹事は小林侑一、鷹野誠一、宮坂收の三氏が擔當せらるゝ事となつた。談話會例會は四月廿四日午後四時より第十一教室に於て開催したが談話者及演題は左の如くである。

一、蠶絲學會の話　茅野　功
一、品種別に依る蠶卵胎子の發育に就て　宮坂　收

滿洲事情講演會　滿洲國實業部技佐濱香三氏（紡織科三回出身）が本年六月より施行せらるゝ滿洲國特許發明法內要說明の爲め訪日せられその途次母校に立寄られたので御多忙中の身を特に割愛願ひ四月廿五日午後零時二十分より講堂に於て全學生職員多數出席し滿洲國事情に就て漫談的に講演があり多大の感動を與へた。

上田市蠶業關係者懇談會　花の四月二十五日恒例により上田市內蠶業關係者第十八回懇親會は本年度の當番司會者蠶絲雜誌社の肝煎で總宣亭に於て盛大に行はれた。恰度母校校長先生の『滿鮮視察談』の御講演があり、又今回學位を得られた蒲生博士の『家蠶血組織の發生並に機能に關する研究』の平易なる御話しがあり續いて宴會で挨拶の後自己紹介、歡談、高笑、懇親と夜の更くるのは早かつた。出席會員約四十名內十二名母校の教職員で何だか母校の會合の樣だつた。

因に關係者は小縣蠶業學校、蠶業試驗場、染織試驗場、蠶業取締所、蠶種業組合、上田蠶種株式會社、生絲の國社、蠶絲雜誌社並に母校の顏振れである。何うやら蠶絲雜誌社の宣傳にもなるらしい。

針塚校長講演　四月廿五、廿六兩日丸子小學校に於て更生經濟講演會が開催されたが二日目廿六日の午後三時より五時迄二時間に亘り針塚校長が講師として講演された。

第四回蠶學談話會　千曲會蠶學談話會に於ては去る四月二十六日午後一時より本校內第八教室に於て左の通り特別講演會を開催した。

『ノーベル賞を得たモルガン博士の業績に就て』　農學博士　勝木　喜薫氏

最初に校長先生の御挨拶があり續いて直ちに勝木博士の講演に移つた。講演の內容に就ては簡單には記せないが兎に角生物學者が世界學界の最高賞を得られたのは今回（一九三四）が始めてであつて、モルガン博士の研究は、人生に最も密接な關係を持つてゐる生理學及び醫學を、遺傳學（特にゲンの問題）の原理といふ高所より觀られたもので、特に醫學の立場からノーベル賞が授與されたのであるといふ。

因に勝木博士の紹介された原著の題名とその內容は次の樣である。

The relation of Genetics to Physiology and Medicine.
Nobel Lecture, presented in Stockholm on June 4. 1934.
T. H. Morgan
Introduction
What are the Genes?
The physiological properties of the Genes.
Genetics and Medicine.

モルガン博士の業績の講演が終つて後勝木博士御自身が且て日本農學會に於て農學賞を獲られた研究業績『家蠶に於ける雌雄分体（Gynandromorphism）』に就て約三十分間許りの講演があつた。

尙當日の聽講者は約七十名、本校教授在田及長野の千曲會員、學生等の他附近中等學校の博物學教師、生徒等も加り又伊那、松本から態々聽講に參會された人々もあつて豫期以上の盛會であつた。

煮繭機、繰絲機の新設　從來煮繭機は二臺使用してゐたが其內一臺腐朽したので今回千葉式煮繭機と入換へを行つた。又繰絲實習に多條機の不足を感じてゐたのであるが今回新に增澤式八臺、御法川式二臺增設する事になり目下据付中である。

校友會ニユース

一年校友會役員　各科第一學年校友會役員は四月廿四日左の如く決定した。

總務部　長末　方夫（蠶一）
井上　正人（絲一）　近藤　士郎（紡一）
文藝部　森　三郎（蠶一）
富永　恭一（絲一）　西谷　剛一（紡一）
劍道部　小山　長雄（蠶一）
小川　典二（絲一）　古平　太三（紡一）
柔道部　谷澤　衛（蠶一）
冬泉　清（絲一）　末　定（紡一）
庭球部　江崎　勇雄（蠶一）
南木　嘉一（絲一）　下田　統夫（紡一）
弓道部　木內　庸一（蠶一）
高野　昌亮（絲一）　宮坂　科晃（紡一）
山岳部　橋本正太郎（蠶一）
石原　二人（絲一）　林　正信（紡一）
辯論部　丸山　喜久（蠶一）
山本琢治郎（絲一）　飯田　武門（紡一）
野球部　長澤　得榮（蠶一）
黒川　重壽（絲一）　鶴岡　要三（紡一）
競技部　鈴木　彦佐（蠶一）
平子　榮作（絲一）　關田　信男（紡一）
卓球部　齋藤　重利（紡一）
石田　正美（絲一）　寺崎　隆夫（紡一）
蹴球部　山田東洋男（蠶一）
飯田　國造（絲一）　淺井　清（紡一）

校友會役員異動　校友會役員の一部が四月廿八日附を以つて左の如く移動された。

辯論部委員　新任　望月藤夫（蠶三）
仝　退任　瀧澤昌一（蠶三）
仝　新任　小林相撲（絲三）

上小武德會大會に本校選手出場　四月廿九日上田中學校道場に於て上小武德會武術大會が開催されたが本校選手の優勝者左の如くである。

劍道二等　平林孝方君（紡二）
柔道一等　福永雄三君（紡二）
仝　三等　谷澤　衛君（蠶一）

新入學者氏名

（五十音順○印は無試驗）

養蠶科（三十二名）

○有川　博　長野　青山　武　長野
○上原　眞徳　沖繩　內久根　六男　長野
江崎　勇雄　福岡　太田　光　大分
荻原　和夫　長野　木內　庸一　長野
北原　幸治　長野　小林　茂　長野
○近藤　員奐　長野　小山　長雄　新潟
齋藤　重利　山梨　鈴木　彦佐　福島
高野　憲三　山梨　○土屋　傳　長野
土屋　久雄　長野　富部　豊　靜岡
中里　道周　栃木　長澤　得榮　長野
長末　方夫　福岡　西川　正夫　長野
橋本正太郎　高知　○長谷川　政雄　長野
堀江　誠　長野　丸山　嘉久　長野
目崎　武美　群馬　森　三郎　香川
谷澤　衛　茨城　○山田　次男　長野
山田東洋男　兵庫　○清水　英人　長野

製絲科（三十三名）

青木　茂美　愛知　飯田　國藏　千葉
石西　正美　廣島　石原　二人　熊本
板谷　隆　岡山　井上　正人　福岡
小川　典二　廣島　岸本悦太郎　長野
北島雄次郎　長野　楠森　定男　三重
黒川　重壽　香川　佐藤　忠富　大分
佐藤　俊郎　愛知　白井　一雄　新潟
鈴木　進　愛知　高野　昌亮　福岡
田中　和人　長野　富永　暲　鹿兒島
富永　恭一　愛媛　長澤　四郎　秋田
中島　藤治　長野　中島　徳健　島根
中屋　正仁　山口　中脇　正登　廣島
南木　嘉一　和歌山　西井　茂雄　兵庫
箕輪　三治　長野　平子　榮作　靜岡
冬泉　清　福島　前田　蘸　靜岡
宮田　皓　秋田　山岸琢治郎　新潟
柳村　春雄　鹿兒島

絹紡織科（十九名）

淺井　清　愛知　飯田　武門　長野
石立　輝久　徳島　木村　欽一　山口
古平　太三　長野　近藤　士郎　岡山
柴田　利男　愛知　下田　統夫　長野
關田　信男　福岡　高木　德男　長野
鷹取　稔　富山　高森　譜　三重
鶴岡　要三　廣島　寺崎　隆夫　廣島
西谷　剛一　大阪　林　正信　富山
宮坂　科晃　長野　吉田　耕三　京都
飯田　省三　廣島

養蠶選科一年（一名）

重田　正壽　兵庫

養蠶選科二年（二名）

渡邊　吉郎　山形　周　憲　民國

製絲選科一年（五名）

鹽入　重雄　長野　武井頴太郎　長野
咸　隆乾　民國　黄　孔武　民國
錢　德昇　民國

製絲選科二年（二名）

黒瀨　信勝　熊本　郡　煥祥　民國

絹紡織選科一年（二名）

中村登一郎　愛知　渡邊　博　長野

教婦養成科（十七名）

赤沼　まさし　長野　飯島　安子　長野
大瀧　廣子　長野　荻上　登志子　長野
柄澤　たつを　長野　小林　玉枝　長野
清水　敏江　長野　白井　むつ　長野
相馬　ナツ　新潟　土屋　道子　長野
中澤　澄子　長野　中村　泰子　長野
橋詰　美智子　長野　原　みつ子　長野
宮崎　久惠　長野　柳澤　連子　長野
山崎　傳　長野

本會記事

本會日誌

四月十日　故林太郎氏の葬儀執行せられ在田同窓生多數參列す

四月十四日　山形縣農事試驗場長鈴木忠三郎氏御逝去に付弔電を發す

四月十五日　肥後製絲株式會社熊本工場火災に付直に見舞電報發す

四月二十日　蠶學談話會に於て講演會開催に付農林省蠶業試驗場へ講師派遣方申請す

四月二十八日　理事會開催蠶絲學雜誌經營の件協議す

五月一日　東京高等蠶絲學校長薨去に付弔電を發す

五月二日　市內總宜亭に於て蒲生博士の祝賀會舉行す

五月四日　養蠶科第三學年生見學旅行のため上京に付原田支會長へ依頼狀發す

支會通信

滿洲千曲會第三回總會記錄

一、期日、會場　昭和十一年二月二日於奉天ヤマトホテル

一、會務報告
湯川會長より會員數の消長昨秋の母校祝典前後の會務に就き報告あり。

一、議題

イ、會費徴集に關する件
會費を普通會費特別會費の二種となし、普通會費は年額六圓二回分納とし、特別會費は必要に應じ隨時徴集に決定せり。但し準會員は半額とす

ロ、會費の使途に關する件
決定せる慶弔內規次の如し
會員結婚―十圓也、會員死亡―二十圓也、會員配遇者死亡―十圓
會費は千曲會發展に資する目的を以て隨時支出し得。

ハ、役員改選
湯川會長の指名を以て次の如く決定せり。
會長　湯川　秀夫
幹事　堤　玄　長田　保美
濱　香三　橋本辰次郎
池田正五郎（庶務會計）

ニ、朝鮮千曲會との連絡協調に關する件
朝鮮千曲會代表者磯野良知氏より相互連絡協調に關する申出あり一同諒承、尙總會開催の都度相互豫告をなし出來得る限り代表出席を計ることに決定せり。

一、出席者
朝鮮千曲會代表者　磯野　良知氏
母校舊職員　石川　博見氏
會員　湯川秀夫氏、安孫子文彌氏、清水衛敏氏（遲參）、濱香三氏、堤玄氏、本間國夫氏、本間茂鉞氏、齋藤猪之作氏、橋本辰次郎氏、池田正五郎氏、中澤とし子氏、荻原けさじ氏

一宮市のみすゞ會

伊吹嵐寒き日も過ぎて、毛織物の主都一宮市にも春の訪れと共に、我等みすゞかる信濃路に共に學び、共に遊びし先輩後輩、三歳の學びにて職を愛知縣毛織物檢査所に奉ぜし者、大谷氏をはじめ九名となり、一宮支所のみにてみすゞ會なる名もて去る年の秋に會を作る。此の四月、新卒業生を迎へ十四名に達し勤務場所決定前にみすゞ會主催にて新入生の懇談會を開く。集るもの

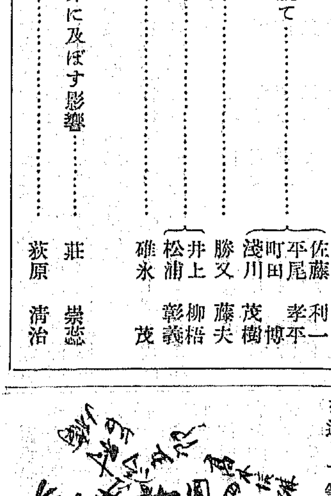
一宮支所――
幹事　岡　豊次郎（幹事）　大谷　隼人
榊　信夫　近藤　義信　鈴木　一郎
藤井爲五郎　村橋　泱　細井　政吉
新入者――
川久保元　淺野　佐門（一宮支所）
小鮒　啓助　高木　信夫（津島支所）
中川　正　（名古屋支所）

の十三名、木會信雄氏（津島支所）は都合に依り出られず。

四月二日午後六時、一宮は餘りに有名な花岡町、料亭は菊水。

配膳は少く、酒少量といへど、思ひ出の數つきず、先輩、後輩の區別なく、共に歌ひ、共に汲む。近來になき良好果をおさむ。

みすゞ會なるもの、一宮在勤にて作れる學校對連絡機關ともなり、諸先生方はじめ一同の御利用を望む。當時の寄せ書きを送りて筆をとゞむ。（F生記）



蠶絲學雜誌第八卷第三號發刊

種々の事情で發行が遲れたが近日中に蠶絲學雜誌八ノ三を發行する事になつた。經費の都合上抄錄は出せなくなつてしまつた。折角原稿を下さつた抄錄者の諸兄には誠に濟まないと思つてゐる。紙上を借りて深謝する次第である。內容目次は次の通りである。

第八卷目次

報　文
1 蠶繭螢光色に關する研究、螢光色の遺傳に就て……山崎　武壽・市瀨　壽
2 絕食蠶兒消化管內細菌數の消長に就て……佐藤　利一・平尾　孝平・町田　博・淺川　茂樹
3 健蠶消化液中の細菌群聚……勝又　藤夫
4 繭絲及各種纖維の耐熱性に就きて……井上　柳梧・松浦　彰義
5 蠶種に於ける經濟史的考察……碓氷　茂
調　査
1 飼料の相違が蠶兒の發育蠶繭及蠶卵に及ぼす影響……莊　崇懿
2 選繭による小顆繭の除去方法……荻原　清治

叙任辭令

母校之部

任陸軍歩兵中尉　（三月卅一日）　嘱託　石井　清司
任陸軍工兵少尉　（三月卅一日）　副手　池内　眞吾
陸叙高等官五等　（四月一日）　教授　倉澤　美德
願ニ依リ副手ヲ免ス　（四月十三日）　副手　崎山　正克
叙從六位　（四月十五日）　教授　倉澤　美德
願ニ依リ副手ヲ免ス　（四月十六日）　副手　枇杷木瀧雄
開場實習勤務　香山　護
養蠶實習勤務　關　博夫
副手ヲ命ス、各頭書勤務ヲ命ス　（四月十六日）
講師ヲ嘱託ス　（四月廿一日）　小泉　所
爾今月俸ヲ給セス　（四月三十日）　副手　池内　眞吾

書職員之部

叙正三位　從三位勳二等　麻生慶次郎
特旨ヲ以テ位一級被進　（四月十八日）

卒業生之部

八級俸下賜　地方農林技師　寺島　親雄　（三月十四日）　福島銅治郎
地方農林技師ニ任ス
高等官七等ヲ以テ待遇セラル
福岡縣農林技師ニ補ス（三月二十六日）
長野縣諏訪蠶絲學校教諭　今井　衷
愛知縣新城農蠶學校教諭　岩瀬　義夫
公立實業學校教諭ニ任ス　中根　眞一
高等官八等ヲ以テ待遇セラル　（三月三十一日）
長野縣農林技手　安川　寛
島根縣農林技手　西　孝重
地方農林技師ニ任ス
高等官七等ヲ以テ待遇セラル　（三月三十一日）
地方農林技師　安川　寛
長野縣農林技師ニ補ス（三月三十一日）
地方農林技師　西　孝重
島根縣農林技師ニ補ス（三月三十一日）
同　安川　寛
十一級俸下賜　（三月三十一日）
同　勝又　藤夫
十級俸下賜　（同　日）
同　皆川　二郎
九級俸下賜　（同　日）
公立實業學校教諭　原　茂
八級俸當分千參百四拾四圓下賜　（三月三十一日）
公立實業學校教諭　田附卯一郎
六級俸當分千七百貳拾圓下賜　（三月三十一日）
地方農林技師　西　孝重
十一級俸下賜　（三月三十一日）
公立實業學校教諭　今井　衷
七級俸當分千六百圓下賜
同　岩瀬　義夫
八級俸下賜
地方農林技師　田浦　準
十級俸下賜（以上三月三十一日）
公立實業學校教諭　岩瀬　義夫
年功加俸年額百九拾貳圓下賜（四月一日）
公立實業學校教諭　今井　衷
年功加俸年額貳百拾六圓下賜（四月一日）
公立實業學校教諭　中根　眞一
愛知縣新城農蠶學校教諭ニ補ス　（四月四日）
長野縣諏訪蠶絲學校教諭ニ補ス　（同日）　今井　衷
同　岩瀬　義夫
長野縣上伊那農業學校教諭ニ補ス（同日）
同　花岡　作彌
愛媛縣立新居農學校教諭ニ補ス　（同日）
叙從六位　（四月十五日）　正七位　篠田平三郎
叙從七位　（四月十五日）　正八位　小島　杉門
地方農林技師ニ任ス　鹿兒島縣商工技手　本間　久
高等官七等ヲ以テ待遇セラル　（四月十六日）
埼玉縣立熊谷農學校教諭兼舍監　齋藤　格次
公立實業學校教諭ニ任ス
高等官七等ヲ以テ待遇セラル
公立實業學校舍監ニ兼任ス
埼玉縣立熊谷農學校教諭兼同校舍監ニ補ス　（四月二十三日）
公立實業學校教諭　中根　眞一
年功加俸年額金貳百四圓下賜　（四月二十四日）
從六位　古山　宗八
叙正六位
地方農林技師　本間　久
十級俸下賜
地方農林技師　古山　宗八
陸シテ高等官四等ヲ以テ待遇セラル　（四月二十八日）
地方農林技師　古山　宗八
願ニ依リ本職ヲ免ス　（四月三十日）

訃報

弔慰金募集

本會々員　故權　寧九氏（絲十）
同　故林　太郎氏（紡三）

右二氏に對し前月號に引續き弔慰金を募集致します。然して右弔慰金は六月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから共れに間に合ふ樣振替口座東京四三三四一番へ夫々故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。

昭和十一年五月十五日

千曲會

弔慰金報告

故高山裕氏弔慰金第四回

金壹圓也　宮澤　勇　吉田隆雄
右合計金貳圓也
累計金拾八圓也

故佐藤壽雄氏弔慰金第二回

金壹圓也　小宮山太助　山内龍一
右合計金貳圓也
累計金八圓也

故權寧九氏弔慰金第一回

金參圓也　千曲會
金貳圓也　蒲生　勇一
右合計金五圓也

故林太郎氏弔慰金第一回

金拾圓也
針塚長太郎　春日井新一郎　山田隼男
金七圓也　大塚富雄
金五圓也
井上　柳梧　大瀧照太郎　岡　德治郎
古谷　榮藏　金子　英雄　千曲會
福島千曲會　近畿千曲會　香山　清和
陸シテ高等官四等ヲ以テ待遇セラル　芝　荒雄
同　門平潤一郎
同　船後　勇平
同　小林　繁
陸シテ高等官五等ヲ以テ待遇セラル
地方農林技師　鹽見　豊一
同　南澤　清
陸シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル
地方商工技師　織田　博
陸シテ高等官四等ヲ以テ待遇セラル　（以上五月一日）
小松忠一郎　碓氷　茂
宮本　靜雄　瀧澤　幸司
金參圓也
和田仙太郎　石倉新十郎　濱　香三
清水　寛孝　小林　清丸　遠藤保太郎
竹下　文英　須田　圭二　依田　啓藏
野口新太郎　三宅　玉留　平澤　勝　唐澤　正
小林繁、北島正生、竹内善吾、熊谷恒次）（田村朝之助、吉越繁夫、柴田久藤田四郎、土屋勉、高原稔、山口悠紀男）
金貳圓也
阿形　輝司　谷　弘　佐藤　利一
内田　浩　目崎　三郎　蒲生　俊興
林　貞三　久保田一德　小林　良亘
宮下　丈夫　山口定次郎　笠原　正巳
北澤　孝一　佐久間幸一　（永田　平）
松岡潔、千村敏三）
金壹圓五拾錢也　佐藤春太郎
金壹圓也
廣川　正治　都筑　貞吉　和田　主計
春原良太郎　清水　運策　小山　滋
石井　清司　田玉龜太郎　久保　藤一
細谷金次郎　中澤　勝也　金子　梓郎
櫻井　隆夫　湯原　諄　高橋　眞澄
中澤　二郎　金澤　勇　坂口　進
和田　貞政　鷹野　誠一　宮坂　收
六川忠一郎　笠原　四郎　細川　豊
茅野　功　倉澤　恒夫　松浦　彰義
町田　博　佐藤　一郎　坂口　育三
上木　忠士
右合計金貳百拾參圓五拾錢也　（以上直接渡分）
金壹圓也
後藤　政之　細井　滿　山名享四郎
平林　茂　勝田清三郎　吉田　隆雄
小宮山太助
右合計金七圓也
累計金貳百貳拾圓五拾錢也　（以上千曲會取扱分）

故林太郎君の靈を弔ふ

志津王

去る三月廿八日學友林太郎君の訃音に接し數少きクラスの一人を失ひ慟哭おく能はず。君の死は全く殉職にして日頃の寡默たる不言實行の眞情が斯くなつたと思ふ。時人情浮薄の現世に於て一服の清凉劑であり師表と仰ぐべき崇高の精神である。

君は上田舊藩眞田城下に武士の魂を以つて生れ幼少より故あつて武士氣質の祖父母に養育せられ持つて生れし魂に一層油を注がれし感があつた。それに加ふるに數理的頭腦は人一倍優れ温順なる氣象は交つて鰹節の如き嚙締むる程味の出る親しみを感じた。

在職中工場に於ける不慮の災難を豫期してか御令閨樣に若し萬一工場に火災等あつた場合は死を以つて殉ずる覺悟の眞意をもらし居られし事を聞くとき君の確固たる人生觀と如何に責任感に強きかを感ずる。

君にとつては人絹工業が君の生命であり工場が肉體であり魂であると感じ居られたと思ふ。

釋尊の說法藥王菩薩本事品に一切衆生悉見菩薩と言ふ非常に佛に熱心に供養せられし方があり一心に業をつみ佛を求め精進經行し尙精進供養の足らざるを思ひ種々の香油を飲み且又身に塗り自ら身に火を點し其の身の燃ゆる事千二百歲にして身が灰燼し命終つて藥王菩薩に生れかはり今尙衆生の闇を照し居る事が說かれてあるが物質不滅の法則と同じく靈魂も永遠に不滅壽命無數却なる故君の靈は決して消滅せず日月の光明の能と幽冥を除くが如く我等が人生に光を與へつゝある事を確信す。一切衆生悉見菩薩にも優る昭和人絹錦工場の猛火の中にあつて『心頭を滅せば火も尙涼し』の態度を以つて消火用ホースを堅く握り最後を遂げし姿を思ふとき鬼神も泣く。全く自己の職責に日常魂を打込まれ身も魂も自己の聖業に捧げし事は菩薩にも優る佛心にして未來永劫涅槃に入られし事と確信し逝ける友の靈に朝夜冥福を願ひ遺せられし御妻子の御幸福を祈る次第である。

林君の事ども

香山清和

一、錦工場出火

三月廿八日午前一時、福島縣石城郡錦村昭和人絹株式會社錦工場第二工場乾燥室第二號機より出火し八千坪の工場を全燒し四人の燒死者を出した。

同社は資本金千二百五十万圓、昭和九年十一月起工、常磐線を挾んだ十万坪の廣大な地域に工場を建設昭和十年六月操業開始日産十噸の能率を擧げたが更に本年二月末國光レーヨン合併分日産五噸の第二工場を完成十日前操業を開始し合計日産十五噸の生産力を有してゐた。然して同社の他に誇る特徴としては石炭工賃廉價の場所に位置し自家火力發電、人絹用藥品即ち硫酸、苛性曹達、漂白粉等の製造工場を有してゐるにある。從つて操業尙ほ淺きにも拘らず他新設工場を壓し好調を續け大いに前途を嘱望されてゐたものである。それが漸く十五噸が完成し漸く本格的全運轉に移らんとする矢先の全燒にて全くお氣の毒と云はねばならぬ。職工數は十五噸の設備に對しては壓力藥品自給の關係上多く約二千三百名を擁してゐた。同工場の心臟たる人絹製造工場は原液室の一部を殘して全燒したが發電所、藥品工場、事務所、寄宿舍、講堂、社宅等は僅かに類燒を免れた。損害は工場八千坪約五百五十万圓、火災保險は約五百六十万圓掛けてあるそうである。

二、殉職事情

時は正に三月廿八日午前一時、前夜午後十一時仕事を終へた女工等が寄宿へ歸り寢に就いて間も無く、男工四百名が徹夜の操業に從事してゐた新築落成して僅か十日目の第二工場乾燥室第二號機から發火し現場員が消火に周章する內、工場がバラック建築で且つ乾燥し切つてゐた爲め忽ち工場へ燒え移つてしまつた。現場員は事の大事となれるに驚き急を社宅に就寢中の責任者林太郎君に告げた。林君は直ちに工場服に着換へ夫人に『俺はもう駄目だ。後を頼む』と云ひ殘し現場へ駈付け職工を督し消火栓を以て消火に盡力及び物品搬出に奔命された。その內に火は益々激しくなり身邊に危險がせまつたので職工を避難せしめ君は尙殘つてゐたので職工に引出されたそうであるが責任觀强き君は再び留むる手を振切つて入場されたらしい。

送電線が切れて工場が暗黑となる頃には最後迄踏留つた人々も命辛ら〳〵で逃れ出して來た。林君も此の時一緒に出たものと考へられてゐたがその內に見當らず無いと云ひ出した。皆手分けで社宅へ聞きに行つたり工場の周圍を幾度も廻つたり最寄々々を尋ねたが遂ひ譯らなかつた。却火は八千坪の工場を嘗め盡し漸く消えた。燒跡を片附けて行く內に職工三名の燒死體と共に林君の遺骸が發見されたのである。君は精練室と仕上室の壁の處にホースの筒先を握り消火委勢の儘うつ伏せに死んで居り逃れようと碗いた樣子は毫も見當らなかつたそうである。察するに二度目の入場は自分の持場よりの出火に責任を感じ死に行つたものと思考される。林君は常に夫人に『乾燥機から火が出れば俺は生きて居られない』と云つてゐたと聞いては益々その感を深くする。世相は打算的に流れ責任觀念の稀薄になりつゝある時林君の如き行動は稀に見る美談と云はねばならぬ。若し之が軍人であつたら爆彈三勇士に比すべく教職に從事するものであつたらば松本訓導にも勝る殉職美談として推賞喧傳せらるべきであらうに、それが工場技術者と云ふ樣な立場にあつた爲めほんの一部の人にしか知られず此の儘に埋もれてしまふのかと思ふと殘念でならぬ。少しでも君の行爲を世間に傳へてやる事がせめてもの追善のなる事では無からうか。

同窓の勤務場所を述べると林君は精練仕上係主任であつた。瀧澤幸司君（絲一九）は仕上、大塚富雄君（紡一三）は精練、山田隼男君（紡一三）は紡絲であつた。出火個所乾燥室は精練に屬するが大塚君の反對番であつた。出火當時瀧澤君は外出から歸つて寢ようとした處で直ぐに駈付け消火に盡力した。大塚君、山田君は丁度寢付いた許りの處で急いで起き仕度して馳せ參じたが工場はもう一面の火となつて入場する事は出來なかつたそうである。

三、錦工場へ急行

僕が林君の遭難を知つたのは廿八日の夜遲くであつた。岡さんの處へ野口氏、小松君、小林君と共に集つて色々相談した。その結果僕が現地へ急行する事となり支度もそこ〳〵に午前一時三十六分の上野行に乘つた。日暮里で乘換へて植田へ着いたのは午後二時、最早事實覆ふべくも無いのにそれでも万一を車中に念じ乍ら來たが植田へ着く少し前車窓に見えた昭和人絹の殘骸を見た時僅かに形造つてゐた空想も破れてしまつた。先づ工場を訪れたが工場長が巡廻中で會へなかつたのでその足で林君の社宅へ駈付けた。夫人に合ふや先に立つは涙であつた。折よく來合せてゐた山田隼男君（紡十三）から林君の殉職模樣を聞いた。同君の案內が出來るかどうか知らないが獨斷で取敢へず會社へ見舞としてビールを出し殉職工場の燒跡に至り林君の殉職個所と覺しき處に立つた。云ひ知れぬ悲しさ淋しさがこみ上げて來た。工場長に會つて見舞の言葉を述べた。學校としてそんな事が出來ないし其の上親類が七人も居ればそれも今は果敢なくなりました。死を眼前にして他迄職場を守つた君等の責任感に强く胸を擊たれます。林主任樣及三君の尊き殉死こそは美しき工場精神の發露であると同時に永久に工場の靑史を飾るものであります。工場は再建され機械は昔日の如く運轉さるゝ日も決して遠くはないでせう。其の時こそ、其の日こそ私等は林主任樣及三君の尊き玉緒を失はれた此の地で、此の工場で精一杯働きませう。拙き詞を以て御慰めする事も出來ません。在天の英靈よ。我々の衷心を享けられれん事を。

弔詞が濟むと燒香となり社長、遺族、重役、職員、男女工手代表、一般の順に燒香した。特に會社では僕等の爲めに男女工手代表の次に上田蠶絲專門學校同窓會代表の番を作つて呉れ僕と北澤孝一君とが燒香した。燒香者が後より〳〵陸續として引き切らず豫定より遲れて二時半漸く終了した。

式が終へると直ぐ工場全員整列見送りの中を自動車を連ねて五里隔つた平町の火葬場へ行く。途中谷を渡り山を越へ約一時間を費して火葬場へ至る。棺を並べた前で讀經燒香の後遺骸は爐に收容された。爐に收め終らんとした時父の死を知るや知らずやの四才の令孃が突然『父ちやんを見たい』と云ひ出し泣かされた。家に歸りしは五時頃、社宅の方々を招待して精進揚げを行つた。同じ頃遺族全部工場長宅へ招待された。北澤孝一君は夕刻大宮へ歸つた。

三十一日、朝起ると早々岡さんの處へ林君の殉職模樣、本日迄の經過、今後の豫定等を詳細に認めて手紙を出した。午前九時頃社長が林君宅へ燒香に見えた。十時頃遺骨拾ひに火葬場へ行く。遺骨を拾つてゐる時一緒に入れてやつた林君得意の手品の道具の一部が殘つてゐて又涙の種となつた。現場で遺骨の前で一通り讀經燒香の後自動車で歸つた。午後から夕刻に掛けて親戚の人は大抵歸つてしまつた。始め親戚は全部歸る豫定であつたが變更されて二人丈殘る事となつた。

明くれば四月一日である。同日はひねもす禮狀の宛名書きで過した。禮狀は一般の外に特に林君持場の精練仕上は男女工手迄全部、紡絲は役付職工迄出す事になつたので千枚近くにも達した。その上會社では全職工解雇と決定し本日女工手に解雇手當が渡されるので歸郷されてしまつては大變と轉手古舞をして漸く間に合はせた次第である。

二日は丁度初七日となり午後二時頃から林君宅で社宅の夫人連を招待し法事のお茶呼びを行つた。

三日朝岡さんの處へ第二報を送る。本日から家財道具の荷造に取掛つた。折惡しく朝から雨である。會社から倉庫係二名、大工一名手傳ひに來て呉れた。小松忠一郎君から二時に着くと云ふ電報が來たので雨中を自動車で迎へに行く。小松君が來たので相談相手が出來て氣强くなつた。

四日は運よく雨は降らないが風はとても强い。どうかと心配した荷造も二時頃漸く終了し貨車への積込も了した。東京前橋、上田へ打電した。夫人は近所へ挨拶に廻る。午後五時社宅前より自動車に乘り工場長以下職員、職工見送りの中を植田驛へ行く。驛にも職員夫人連を始め多數の見送りあり、午後五時四十三分の汽車にて遺骨を抱いて植田を出發する。一行は林君夫人、令孃、夫人伯母上、小松君、僕、工場代表として大塚君、それから林君に緣故ある工手も同行する事となり即ち小山、甲田、新保、西原、未詳一人の諸君及び工場長から托された女工手堀內孃の計十二名である。上野着九時五十四分、驛へは東大春日井助教授、母校金子教授、森山元教授、野口助教授、碓氷茂氏（紡三）及親類の方々が出迎へて呉れた。

驛前上星旅館へ行つて休憩する。休憩中林君の殉職の模樣を大体物語る。小松君の殉職模樣、本日迄の經過、今後の豫定等を詳細に認めて手紙を出した。午前九時頃社長が林君宅へ燒香に見えた。十時頃遺骨拾ひに火葬場へ行く。遺骨を拾つてゐる時一緒に入れてやつた林君得意の手品の道具の一部が殘つてゐて又涙の種となつた。現場で遺骨の前で一通り讀經燒香の後自動車で歸つた。午後から夕刻に掛けで親戚の人は大抵歸つてしまつた。始め親戚は全部歸る豫定であつたが變更されて二人丈殘る事となつた。

明くれば四月一日である。同日はひねもす禮狀の宛名書きで過した。禮狀は一般の外に特に林君持場の精練仕上は男女工手迄全部、紡絲は役付職工迄出す事になつたので千枚近くにも達した。その上會社では全職工解雇と決定し本日女工手に解雇手當が渡されるので歸郷されてしまつては大變と轉手古舞をして漸く間に合はせた次第である。

二日は丁度初七日となり午後二時頃から林君宅で社宅の夫人連を招待し法事のお茶呼びを行つた。

三日朝岡さんの處へ第二報を送る。本日から家財道具の荷造に取掛つた。折惡しく朝から雨である。會社から倉庫係二名、大工一名手傳ひに來て呉れた。小松忠一郎君から二時に着くと云ふ電報が來たので雨中を自動車で迎へに行く。小松君が來たので相談相手が出來て氣强くなつた。

四日は運よく雨は降らないが風はとても强い。どうかと心配した荷造も二時頃漸く終了し貨車への積込も了した。東京前橋、上田へ打電した。夫人は近所へ挨拶に廻る。午後五時社宅前より自動車に乘り工場長以下職員、職工見送りの中を植田驛へ行く。驛にも職員夫人連を始め多數の見送りあり、午後五時四十三分の汽車にて遺骨を抱いて植田を出發する。一行は林君夫人、令孃、夫人伯母上、小松君、僕、工場代表として大塚君、それから林君に緣故ある工手も同行する事となり即ち小山、甲田、新保、西原、未詳一人の諸君及び工場長から托された女工手堀內孃の計十二名である。上野着九時五十四分、驛へは東大春日井助教授、母校金子教授、森山元教授、野口助教授、碓氷茂氏（紡三）及親類の方々が出迎へて呉れた。

驛前上星旅館へ行つて休憩する。休憩中林君の殉職の模樣を大体物語る。小松

君、夫人伯母上とは此處で別れ午後十一時五十分上野發する。如上の人々の見送りを受けて出發する。

高崎で日本人造織維會社の三宅、柴田藤田、土屋、山口の諸君が出迎へて呉れた。上田着五日午前六時廿六分、驛頭には母校職員其他の殆んど全部の顔が見え嬉しき限りであつた。

岡さん、小林君が配置して呉れた自動車で紺屋町の林君宅へ落付く。葬儀に就て大体打合はせた後岡さんの處へ報告に行く。岡さんは腹痛で伏せつて居られ話を聞くだに苦痛の樣に見受けられた。朝の出迎へには藥で一時痛みを抑へて出て來られたのだと聞いて感激した。

四、葬　儀

林君の郷里に於ける葬儀は四月十日上田市花房町淨樂寺に於て午後三時より執行された。母校よりは校長以下職員全部、傭人、學生も多數會葬した。式は僧侶の讀經から始まり遺族、親戚、工場代表、專門學校として針塚校長、千曲會代表飯島正胤氏、友人代表として小松君と僕、一般代表の順に燒香し次いで針塚校長、古谷教授千曲會代表飯島氏の弔詞があり引續いて弔電二十九通の披露があつた。母校關係の弔電を下された方々は左の諸氏である。（敬稱略）

靜岡千曲會　群馬千曲會　福島千曲會
愛知縣紡織科出身者一同　近畿同窓生
一同　東洋レーヨン千曲會　鶴田定平
高木三治　鹽原克巳　島倉督三　尾藤
省三　佐藤一　坂路善一　碓氷茂　宮
本靜雄　高品喜一郎　三宅玉留　畠山
茂忠太　若井弘　江之村一雄　北原基
山本賢市　瀧澤幸司　大塚富雄　山田
隼男　乾正　猪原良芳　北野三郎

最後に僧侶の讀經があつて式は終了した。直ちに遺族達は埋葬の爲めに墓地に向つた。午後五時から田町谷口に於て法要の招待があつた。母校よりは校長、各科長及紡織科、蠶絲化學教室の職員が全部が招待された。夜は林君宅で念佛があつた。

十一日は午前十時から寺參りである。母校關係からは小松君と僕が加つた。寺で讀經燒香の後別室で茶菓の接待があり それから數町歩いて山上の墓地へ行く。林君の墓標は上田市を眼下に見降す地に建てられ、此處に祖父母、父母に抱かれて靜かに眠つてゐる。寺參りが濟むと直ぐに林君宅で精進揚げがあつて終つた。

五、同級生の弔問

四月十九日同級碓氷茂君長岡へ講演の歸途立寄つて呉れた。小松君と共に碓氷君を林君の墓に案内した。

四月廿四日同級濱香三君滿洲より内地出張の途次母校を訪問した。廿五日小松君と共に肅條たる春雨の中を墓參し次いで上田原の夫人の處へ案内した。

更に同級宮本靜雄君から『林君の殉職事情を知り度い弔慰方法はどうするか』と尋ねて來た。僕からは折返し『禿筆ではとても盡せぬ。間も無く出張があるから立寄つて詳細報告する』と返信し出張の途次五月一日夜四日市の同君宅を訪れ林君の事ども で一夜を語り明した。之で同級生は全部である。

六、林君の略歴

林君は上田市出身、然も上田藩士の家に生れた。上田小學校、上田中學校を經て大正十年母校絹絲紡績科に入り同十三年第三回の卒業生として卒業されたのである。卒業後は家の御都合から古谷教授の下に助手として勤務し同教授畢生の研究たる『絹絲紡績原料の純粹醱酵精練』に就て揮心の努力を捧げた。斯くて榮えない惠まれない仕事で十年の歳月は流れてしまつた。其の間昭和二年講師を囑託され化學實驗を擔當されると云ふ樣な事はあつたが大体變化のない見込の無い前途には辛抱強い君も相當腐つてゐられたに相違無い。昭和七年七月古谷教授が絹絲の精練及漂白研究の爲め三ケ年佛米に洋行せられる事が起つた。之が君の方向の轉換期となつた。古谷教授の仕事が無くなつたので同教授の精練漂白論を代講するは事は殖えたにせよ相當閑散に見え自分の將來と云ふ事に就ても本當に考へられる樣になられた。此の頃僕は學校に於て比較的繼子扱ひにされてゐた人絹工場の本格的運轉を企圖し廣くメンバーを求めてゐた。そして林君にも援助を懇請した。何を勘めて容易に乘つて來なかつた。林君には珍しかつた。言下に參加を諾して呉れた。そして金子教授指導の下に林君と僕が中心となり三宅、大塚、唐澤、山田の諸君を集めて人絹工場の運轉を開始したものである。表面的には僕が運轉してゐる樣になつてゐたが僕は唯事務上の折衝をして廻つてゐた丈で實際の仕事は全部林君がやつてゐた。

林君の人絹に於ける奮闘振りは實に目覺しかつた。あのおとなしい消極的な君にあんな反面があるのか全く別人の感があつた。僕は君を見損つてゐた。君の新しい偉大な方面を發見した樣な氣がした。

此の奮闘振りが人の目に留らぬ筈は無かつた。古谷教授の肥料學の代講に來られてゐた東大農學部助教授春日井新一郎氏が之を見て痛く感心し當時創業された許りの昭和人絹株式會社へ紹介したのである。

その結果林君は大塚、山田の兩君を連れて昭和人絹へ入社する事になつたのである。それは昭和九年十一月の事であつた。當時昭和人絹は未だ工場が建設されて居らなかつた。親會社川崎肥料株式會社の人絹紡出に從事し五月運轉開始す るや拔擢され精練仕上係主任となる。人絹工場は原液、紡絲、精練、仕上の四部に分れてゐる。その内二部を主宰されたのであるから如何に重要視されたか譯る。君は此處で本當に一生懸命に働いたらしい。幾ら氣を揉んでも働いても容易に思ふ樣にならなかつた。その爲めに身体も大分衰弱された樣だしそれに神經衰弱の氣味も見えた。それでアルトーゼや肝油其他色々な強壯劑を用ひられた樣である。夜よく寢られぬと云ひ寢言を云ふ事も多かつたと云ふ。然かもその寢言が皆會社の事許りであつたそうである。昨年八月頃には多少辭意を洩された事もあつた樣である。

然しそれも漸く最近になつて多少樂になつて來たらしく『やつと自分の身体になつた。これからは休目には休めるかも知れぬ』と云はれそうであるが間も無く此の遺難である。林君は全く苦勞をしこの世の中に生れて來た樣なものである。幼にして複雜な家庭に苦しめられ母校卒業後は他人の爲めに長年月緣の下の力持で過し何等惠まれる事無くそして人絹工場へ來て又苦しみ續け漸く樂になりかけたと思つたら死んでしまつたと云ふ譯である。

七、思　出

君は數學的の頭腦はクラス一番であつた。數學や應用力學の宿題は大抵林君がやつて來て僕等は盥廻しに寫したものであつた。

林君は學生時代は卒業する迄ずつと坊主頭で過されたが。僕の級ではそれは君一人丈であつた。その坊主頭は極く最近迄續いた。髮を伸してから未だ數年は經過してゐるまいと思ふ。これも君の緊物である事を示す一つの證據とならう。

君は勝負事は好きで且つ强かつた。碁、將棋、五目、麻雀、花合、百人一首等々何んでもどれであつた。あの溫和な君にこうした反面のある事は實に不思議であつた。こう數へ立てたものゝ内最も私の印象を深くしてゐるものは碁である。僕は現在ザル碁を少し囓つてゐるが之は林君の賜物である。學生時代林君の宅へセッセと通つて井目から打出したものである。段々出世して今は三目迄になつた。實際はもつと遠つてゐるであらうが林君は下手を扱ふ事はうまく無かつた。それは林君の打ち方が堅實で聊かのごまかしも無かつたに原因する。そして始めの打出しの一石から時間をかけて充分考へて打つと云ふ風である。もう一石で死ぬと云ふ處になつてから始めて考へ込む僕等の碁などとは大變な相違である。こんな方面にも君の堅實な性質がホノ見えてゐた。

君が碁や將棋を打つ時に如何に周到に考へて打つかと云ふ例に次の樣な事がある。上田の町にも時々五目や詰將棋の露店が出てゐる事がある。君が之等の店の前へ立つて腕を組むと必ず敗局を取つて歸つたそうである。こんな事が度重なり遂に君が店の前へ立つと向ふであやまつてしまふ樣になつたと云ふ話が嘘か本當か傳つてゐる。

僕等の學生時代には禁酒は今程嚴重でなかつたと記憶する。だから相當呑む學生も多かつた樣だ。その中に酒嫌ひの看板を揭げてゐたのが林君と斯く云ふ僕であつた。僕の方の酒嫌ひは頗る怪しげなものであつたが、林君のは正眞正明掛値なしであつた。林君は絶体に盃を手に取らなかつた。君が昭和人絹へ入社と決定した時は一つ心配になつたのは酒を呑まぬと云ふ事であつた。紡織科の會合へ顔を出す樣になつてから大分勉强したが未だ一人前と云へなかつた。然し川崎へ行つてから相當發展してゐると聞いて杞憂に過ぎなかつたと蔭乍ら喜んでゐた。

八、僕　と　君

僕と林君とは同じく上田の生れで學校は蠶絲專門迄全部同じであつた。その上舊藩同志と云ふ連絡もあり客觀的情勢は最も親しかるべきであつた。然し君士人僕とでは ソリが合ふ譯は無かつた。君と會つても何時もシヤベリ立てるのが僕で默つて聞き流してゐるのが君であつた。そして交際は結局碁の相手以上に一歩も出ないで終つてしまつた。學校を卒業すると君は母校に殘り僕は紡績工場に入つた。距離の遠隔はすつかり君と疎遠にしてしまつた。たまに歸郷する事があつても母校を訪れる事があつても君に會つて見ようとは考へなかつた。尤も母校を訪ねても僕の行くのは紡織科で君は化學に居られたと云ふ事も原因してゐる。唯交際の連鎖は年一回の年賀狀の遣り取り丈であつた。

多少共交際らしい交際は僕が工場を辭めて母校に歸つて來た時から始まる。僕が母校へ歸つた頃は君は全く紡織科卒業生の色彩を失つてゐた。君も紡織科へ寄附かうとはしなかつた樣だし紡織科でも君を默殺してしまつてゐた。君は紡織科の職員と殆んど往來せず又紡織科の會合にも出席した事が無かつた。君のこう云ふ態度は獨り紡織科のみにては無かつた。學校や千曲會の會合にも交際方面にも殆んど顔を出される事が無かつた。だから千曲會からも忘れられた形であつた。これ程君は古谷教授の手足として丈に脇目も振らず働かれてゐたのである。

僕が母校へ歸つて以來極力君を紡織科の水準線に引張り出す樣に努めた。何事にも反對せぬ君は養成を表し乍ら實際どの邊迄動いてゐたか僕には讀めなかつた。然し多少接近して來たのは事實であつた。

然るに君が僕と共に人絹工場運轉に從事するに及んで君との交遊は急に進展し全く紡織科の人間になり切つてしまつたのである。

斯うした交遊も一年足らずして名殘りを惜みつゝ君を昭和人絹へ送つたのである。空間が隔てると疎遠になつた。君は創立の工場で多忙僕は筆不精と云ふ譯で書面の往復は數へる程しか無かつた。それでも十年の正月には陋居を訪れて呉れたし僕も九月錦工場を訪れて見た。

君の最後の手紙は十一年の年賀狀であり最後の顔合せもその一月十九日であつた。此の君と最後の對面にも今にして考へると何か因緣がある樣に思へてならない。

君の父上が逝去され歸郷されてゐると云ふ事を聞き小松君と共に晝頃紺屋町の宅に林君を訪れ弔問し四方山の話をして歸つた。その夜用事があつて岡科長の處を訪ねた。すると偶然にも林君が來合せてゐたのみならず不思議にも小松君迄が來會はし又三人一緒に會つた。蟲が知らすか最後の名殘を惜しんだのであらう。

君との交遊は斯くして短期間で終へてしまつた。もう少し親密にしたい又もつと伸良くあるべきであると思ひつゝ遂ひにそれなりになつてしまつた。こんな事があるならもう少しやつて置けばよかつたと今更乍ら後悔してゐる。こんな狀態であつたから林君が死んだからとて『僕が親友でございます。何んでも相談相手になります』と宋亡人の前へ現れても おいそれと頼めないのは當然である。然し僕は生前親友らしくしなかつた丈餘分に今後に對し力を致さなければならぬと思つてゐる。何卒僕の意を諒とせられ役に立たぬかも知れぬが利用せられん事を望む。

今や夫人は遺兒の養育に雄々しくも立たれてゐる。小松君と僕は及ばず乍ら何處迄も力になつてあげる積りでゐる。君が育てあげた母校の人絹工場も早や三代目を迎へ湯原君や高橋君が奮闘してゐて呉れる。ステープルファイバー裝置も間も無く完成するだらう。昭和人絹も復興に取掛つたと聞いた。君以て瞑せられん事を。

一、林氏殉職當時

瀧澤幸司

昭和十一年三月二十八日午前一時工場の一角に發した火は遂に林太郎氏を昇天せしめたのである。

工場乾燥室から午前一時發火した火は瞬時にして工場を全燒せしめた。當時歸宅就寢中の林主任は現場よりの急使に早速飛び起き表に出た時は火は擴大こそして居らねど屋根を拔き柱狀をなして昇つて居た。其の時林主任は奥樣に言はれたとか『最早駄目だ。俺はどうなるか譯らん。後を賴む』と。平時から責任觀念の強い林主任は此の時既に自己の職場からの出火に對して責任を痛感し死を覺悟されて居たのであつた。

此の一言が奥樣に殘された最後の言葉であつたと聞き、氏が平時如何に心の用意〃出來て居られた人であつたかを一層強く感じた。

早速現場に馳付けた氏は乾燥室に突入部下工員を指揮し、防禦、物品搬出に當らしめた。然し建物は乾燥の極にあつた故、火焰は益々擴大し遂に氏の身邊に迫つて來た。最早之迄と氏は部下工員を外に避難せしめ自分は更に猛火の中に頑張つて居られた。再三避難を氏に勸めたるも依然として踏み止まつて居る爲め遂に部下工員は氏を猛火から引出した。

引出されたる林主任は拱手して火を見るに忍びず、再び室内に入らんとした。然し乾燥室は全く火の海と化した爲め其の隣室―此の室とて黑煙で滿ち危險此の上も無き物なり―に入らんとした。近くの人々が極力進入を阻止したるも遂に其の手を打拂つて馳込んだのであつた。此の直後小生等が馳付け小生は直ちに林氏の入つた室に物品搬出すべく飛入つたのである。入口から相當入つた位置に黑煙の中に一人立つ林氏の姿を見つけ、馳付け、『林さん一人で何して居るのです』と聲を掛けられ始めて小生の來るを知り、『來て吳れたか。頑張つて消火して吳れ賴む。室の奥にある消火栓で消火して吳れ』と言はれ、小生も直ちに物品搬出から目的を變へ『林さん大丈夫です。引受けました』と一言殘して小生等の後から來た二、三名と共に更に奥へ入つた。林さんは其の儘の位置にて黑煙の爲め見へざれど小生等消火する者に『消火を賴むぞ。賴むぞ』と何回か繰返されて居たが何時の間にか消火準備終了頃は聞こへなかつた。

然し當時林さんは以前の儘の位置に居られ一般工員の指揮に當られてゐた。而して此の林さんの位置は最後迄其處であつたと信じて居た。

消火作業開始頃火勢は更に加はり此の時全工場の電氣が停電し周圍が燃えて居るとは言へ本當に霧の中に入つた樣で一尺先が見え無くなつてゐた。

こんなに煙が濃かつたのかと停電して始めて知つた。其の停電の次の瞬間乾燥室から屋根が落ちた爲めか、機械の爆發か、一度に濃厚なる黑煙と熱空氣及焰が我等に迫つて來た。其れが殆んど堪へ得られない苦痛を與へた。此の時中間に居た小生すら此の樣に感じた位であるから最尖端に居た人々（殉職せられた大部分の人）は非常に大きなショックを此の時受けられたと思ふ。否或は此の時倒れたかも知れない。

小生は最早如何んとも能はざるを知り『最早駄目だ。引返せ』と叫びつゝ出口を振返つて見た。すると最初我々の突入口にして且つ現在では只一つの出口が火の海である。最早餘裕が寸時も無い。『外に出ろ』と叫び乍ら小生等出口に向つて引返したが、皆二、三步進んだ丈で暗さと、足場の悪い爲めに倒されてしまつた。倒れた時黑煙を吸ひ呼吸困難となり且つ上体を持上げた時は半分失神狀態にて方向は解らず黑い霧の中に居る樣な狀態にて一寸先も見へず、只時々室の周圍の壁が燃え落ちる時其の方向のみが、ぱつと明るさを增すのみ。出口は火の海、勿論火元の乾燥室は燃え盛り、小生も遂に何れか出口で何れが乾燥室の方向が不明となつてしまつた。寸時も考へる餘裕が無い。丁か半か、生か死か、遂に意を決し片方の火の海に向つて腹這ひになつて進んだ。約出口迄三十米餘の距離であつたが何回か頭を機械や柱に打付け、且つ出口にあらざる方向に進んで居るのでは無いか、若しそうだとすると自分は死ぬのだと考へた。三十米の腹這ひは實に長かつた。火焰を潛つて達した所は出口であつた。殉職者の中には此の方向を誤つた爲め遂に歸らぬ人となつた者もあつた。

出口から飛出して直ちに呼吸困難の爲め新鮮な空氣を吸ひ再び飛出した出口に來た時、各々口々に林主任が未だ出ないと言ふを聞き不審に思ひ『林主任は我々より出口近くに居た筈だ。出て居られない事は無いだらう』と言へば皆『そうですか。一寸見當りませんが。では先に出られたかも知れません』と言ふので、小生は外で林さんを見付けさせると共に、でも念の爲め中に入つて探そうと入口に額を入れて見たが最早一寸も入れない。室内は火焰で一杯である。聲を限りに呼んで見たが反應は無い。自分自身も林主任は入口近くに居たとのみ思つて居たので、直ちに其の出口を離れ、他の作業に從事しつゝ人々にも聞いて歩いた『林主任を見た者は無いか』と。一部の人は見たとも言ふたが、次第に林主任の安否が氣にかゝつて來た。

夜の明ける頃は益々林主任の行衞不明は確實と見られる樣になつた。故に未だ燃え切らぬ燒跡を死体搜索にかゝつたのである。

當時未だ小生は林主任は最後迄小生と別れた點、即ち小生に指揮された位置に居られたとのみ思つて居た爲め其の位置を燒棒、金具等を取除きつゝ探させたが遂に其の位置に居らず。二十米から離れた小生等消火に努めた場所に外の二人と共に發見された。

林主任以下三人共貴き工場の犧牲者としては餘りに痛ましき姿となつてゐた。林主任は壁の下敷となつて兩手を合掌せしめたまゝ少しの亂れた跡も無く下向きの姿にて背面及頭顏は勿論腹部の一部を殘して眞黑の姿と化して居られた。

餘りに急激な變化で目前に林主任の死体を見つゝも現實とは思はれない。數刻前迄聞いた小生を呼ぶ聲未だ耳を離れざるに聲の主は此の世の人であらざるとは。

當時林主任は、小生等に消火の指揮を命ずるや暫くは其の位置に居られたが、直ぐ小生の後を追つて消火栓の場所に來られ小生が最初に消火栓の尖端を持つて馳出したるを他の一人が中途にて奪ひそれを更に林主任が取つて行き最尖端に位置されたらしいのである。而して最後迄消火に努めたと共に部下を脫出せしめる可く努力された形跡が判然として居り林主任の責任感と共に自分を犧牲にして迄部下を救はんとした部下を愛する心情とが思ひやられ淚なくしては見られざる現場であつた。

部下二名は同じく林主任の傍に遺骸となつて發見された。

林氏は自分の職場からの火災に對する責任と、部下を死に導いて自分ばかり生きて居られない、部下を助け出そう、との部下を愛する精神とから遂に貴き殉職者となられたのである。

二、在りし日の林さん

瀧澤幸司

林さんを始めて知つたのは、確かに松尾購買組合の樓上で催された上中會の時だと思ふ。後加美さんの許で少し人絹を習つて居る時、時々會つた。然し一言も口を開いた事はない。只此の人も上中出かと思ひつゝ輕く頭を下げて居た。

山本さんの化學絹絲から色々の都合で昭和人絹に入社したのが昭和九年十月二十日だ。本社には約十日程前額を出して置いたから、二十日には直ちに昭和肥料の川崎工場内にある研究室に出頭した。技師長の井上さんから貴郎の先輩が居られますよと言はれ誰だらうと思つた。林さんと言はれても一寸誰だか見當がつかなかつた。部屋に行つて見ると何んと居た。大塚兄が、林先輩が。最初は仲々傍り難かつた。俺の樣な騒々しい無茶な奴が、林さんの樣な聖人みたいな人の所には。然し話して居るとなか〳〵面白い人である。學校に居られた時はそんなにやられなかつたらしいが、酒もやる、飲むと歌ふ、踊る、手品はやる、本當に多藝の人であつた。時々は飲み過ぎて其筋から注意を受ける事もあつた。それ程共に飲む人を愉快にした。

小生等若い者の飲んで騒ぎたい氣持を好く知つて部下或は同僚から宴會の話を持ちかけられて斷つた事なしであつた。林さんの十八番は工場で共に飲んだ事のある人は皆知つて居る。一寸此處には書きかねる歌と、踊だ。之を何時の宴會でも行ふのを如何なる筋から入つたか、遂に奥樣の耳に入つて隨分絞られたらしい。然し之とて『此の前歸宅して絞られたから之からは歌はぬ、踊らぬ』と言つて居乍ら宴酬に成り酒が廻ると坐して居られない習慣だ。忽ち十八番が始まる。又奥樣の耳に入つたらどんなに絞られるだらうと思ひつゝもつと歌へ、もつと踊れと囃し立てるのである。

又林さんと一緒に飲みに行くと女に不自由しない。其の料理屋に居る女中にせよ、藝者にせよ、兎に角女と名の付くものは、他人の座敷にゐる者であらうが何んであらうが廊下とんびをやつて廊下に頑張つて居てみんな自分等の宴會場に持つて來る。料理屋中の女性を全部我々の宴會場に侍らせた事が何回かある。之れ皆林さんの得意とする廊下とんびの賜であつた。

林さんは酒量は大した事がなく、直ぐ醉はれた。之が又便利だ。我々の樣な二升か三升飲まねば腰も動かさぬ樣な奴は宴會も九分通り進み終り近い頃漸く調子が出て來る。これでは當人も面白くない。他の一緒に飲んで居る者も面白くない。林さんは盃に數杯から最早調子が出て來て而かも最後迄頑張る。其の場の宴會許りでなく二次會、三次會迄我々若い奴等と飲み歩るかれた。

工場が福島の田舍に移つてからは、二次三次と飲む場所がない。飲屋は一軒きりである。然し横濱に居た時は好く腹違ひになりつゝインチキを飲み歩き廻つたものだ。

林さん程二人者であり乍ら、一人者の我々と一緒に痛飲し、共に叫び、共に踊り共に語つた人はない。ワイフを持つと人間が活性を缺いて來る。次第にこせ〳〵した性質になるが普通であるが、林さんは實に愉快な三人者（子供迄入れて）と思はれぬ樣な生々しさがあつた。故に二人者の中に唯一の一人者の話し相手飲み相手であつた。

○

圍碁は林さんは我々の師であつた。工場でも二、三番であつたらうと思はれる。尤も圍碁大會をやつたのでないから確實な所は譯らんが。林さんと[illegible]から碁を習ひ始めた林さんを相手に九目、八目、七目と今では相當の所まで進んで居る。林さんに何目かは一寸言はれぬ。林さんの技量を知つて居る人が居ると俺の腕が譯る事になるから。

林さんは運動は餘りやられなかつたが勝負事は好きで、且つ熱中した。圍碁將棋、麻雀、カルタ等々負けず嫌ひで相手に負かされると何回でもやる。奥樣などの存在を忘れて來る。眼は血走つて來る。物凄い勢であつた。故に林さんの氣に負かされ引いては勝負迄負かされた事が何回もあつた。

○

種々書いて來ると林さんは飲事や勝負事にのみあつて來られた樣に思はれるが家庭にあつては好き父であり奥樣に取つては好きおやぢであつた。

林さんの家に遊びに行くと時々否常にアテつけられた。俺の樣な結婚適齢期の青年には被害甚大であつた。林さんの家から歸つて直ぐ冷いシングルベツトなど入れない、二、三杯のアルコールの力を借りないと眠れなかつた事が何回あつたか譯らない。之では林さんの家に行く度に二、三杯のアルコール代が必要になり等の樣な一ケ月づゝ給料を經理から前借する樣な人間には續かない。以後奥さんからノロケ代を徴收しようと思つて居たが遂に其の機會がなく終つてしまつた。

植田に遺骨を訪ねて

忠郎

昭和十一年三月廿八日午後十時、場所はうな藤料亭の八疊間、それだけで何をうろついて居つたか讀者の御想像に御任せする。會するものは千曲會幹事の川船兄とN氏と筆者だ。川船兄が家事の御都合で上田を去るに當つて親交ある方々の心ばかりの送別會の濟んだ後だ。二次會も型通りに終つたが最後の名殘りを譴茶で惜むべく三人で元の場所に戻つて醉眼朦朧たる体を支へつゝ相變らずN氏の酒間の坐談に花を咲せて居つた時岡科長よりN氏へ電話にて昭和人絹會社全燒を知らして來た。其時は林太郎君の燒死も八分通り確報らしかつた。然し場合丈に林君の存否と共に其他同窓生及關係者の消息には多分の疑が懸けられた。間もなく電話にて招致を受けて科長宅に赴いた。科長始め野口、香山、小林等の同窓と鳩首善後策を考究して取敢へずK君が錦工場へ出張することに決つて散會。

其夜時間の都合上K君と共に林君の自宅を訪ねることにした。K氏と自分丈になつて見ると級友として林君の半眞半疑の死の報告に對して聊か胸の動搖を感じた。人間、林を中心に君の生前の家庭生活、社會生活の幻影が止りなく互の腦の一端を流れては亦逆に流れた。『そうだ！俺も一緒に行つて見やう。若しも彼があの世のものであつたならば彼の靈前でうんと泣いて彼の死を慰めてやらう。それに遺族を前に彼方には幾多の問題が横つて居る。役には立たないが僕等兩人の協力を待つものも多からう。新設會社の事なれば〇〇〇〇問題とても懸念される一つだ。尙林君は同人絹會社内にあつては千曲會として急先鋒として乘り込み大黑柱の存在たる感を失はなかつた。故に會社の更生と林君死後の同窓生の活躍に支障を來しはせぬかと考へられるのも一つだ。之等の事には自ら機會と理由とを失ふてはまづいと思ふ。兎もあれ行つて見やう』と。着のみ着のまゝの用意で科長の意見を求むべく午前一時頃就寢間際の宅を敲いて見た。此の時程、交友意識、同窓意識の明瞭さを覺えた時はなかつた。然し學校との連絡もありK氏彼地到着後の第一報により出發しても遲くはないと考へ同行を見合せる事にした。

翌朝は化學教室の井上、古谷、金子の各教授及須田先輩に取敢へず通知をし尙林君の自宅と學校との間を幾度となく往復して詳報を求めた。K氏よりの報告を千秋の思ひで待ちつゝ社葬の日を來る四月三日頃と自分勝手に想像し、古谷教授と同行も打合せ其他準備を進めた。午後六時三十分頃來たK氏よりの報告は想像を裏切つて三十日が社葬、四日遺骨歸鄕を傳へられた。

然しK氏の歸校を前に、自分としては例の問題を秘めて奧州植田の遭難地に林君の靈を訪れたい氣持には變りはなかつた。偶々東京に開催の蠶絲學會、工業化々學會出席の序もあり校長先生、岡科長の御配慮に依り早めて二日午前十時卅六分發で出發した。斯うした場合には何人も体驗する事だが自分も一際立つて慈悲の心で自分の環境の社會相を眺める事が出來た。車中に連らなる老も若きも男、女を問はずお互に異なる人生感に動かされて思ひ〳〵の行動を執つて居るのが解る程迄に冷靜に立ち返へつた。おゝ林君の毛細管の何れかに血行のやまない部分があるならば未だ活して置きたい。そしてもう少しでも長い人生感にでも弄させてやりたい氣分に充された。

上野驛の曉も自分には慌しく過ぎた。途中助川驛の日立製作所を見ても只近代文明の傍若無人の發達振りは呪はずには居られなかつた。吸々のつまり林君の此度の殉死も客觀的には斯うした豪壯なる有機体の殘した老排物としか見られないとするならば共れも無理からぬ嘆である。第一勿來トンネルを過ぐる頃隣の席に居つた妙齡の婦人に左方遠く見ゆる丘上が勿來關趾と敎へられた。茨城縣と福島縣との境勿來を過ぐると植田だ。勿來は『來る勿れ』である。植田は林君の生地『上田』に通じ而も上は天に植は地に相關聯する言葉である。後で植田にて聞いた無慘の林君の最後から考へれば此の界隈は彼にのみとつては實に種々の因緣付きの土地と思はれる。人生に陰陽共存するならば何故に神も佛もそれとなく彼に示さなかつたか。詩人なりせば此の地と彼の死とを諷して何か物したゞらうに。勿來を過ぎて間もなく左に焦土と化した廣漠とした工場の敗地を直前に見た時『おゝ林死んだか』と始めてこみ上げて號泣した。燒けた廢墟の跡に横はる使用に堪えぬ文明の利器は林君の後に何人を待つやら巨大の團体を惜げもなく風雨に曝されて居る。勿ちにして變る自分の婆れた態度を怪訝な顏で眺めて居つた例の婦人の間に其の出來を話し終る時分植田に着いた。愴惶として降りた。昨夜來の雨は蕭々として未だ止みそうもない。それに時々無雜作に海風が横なぐりにやつて來る。

K氏の出迎へを受けて自動車を驅つて工場へ向つた。車中K氏より其後の顚末を聞いた。〇〇〇〇問題も社長の從業員愛撫の精神とK氏の努力で思つた額迄行かずとも圓滿に解決された由。社宅に着いた時は荷造り最中で近所の奧さん連中の御手傳ひと荷取亂で足の踏み場もなかつた。林君の死はもう疑ふ餘地はなかつた。一通りの挨拶を終り遺骨に向つて燒香の時は万感こもつて手の震へるを覺えた。傍でいたいけない遺兒が『父ちやん新聞見てねんね』と何も知らずに片言交りで答へるのもしほらしい。彼の生前の家庭生活の最近を未亡人より聞いてほろりとした。遭難當時の作業服のポケットより出た紡織手帳と折尺の燒殘りと胴卷とは火焰に包まれた彼の苦闘を物語るに充分であつた。それ以上其時の彼を想像するは無理であつた。荷造りの手傳ひの終つた夕方、吉田工場長（同社取締役の宅）を訪ねた。小柄の工場長が潤んだ眼で辭を低うして『此度はとんだ事で』と此方で云ふべき事を先に云はれた形だ。續いて殉職狀況と工場バラック建と自己不在の出來事を悔いた話をせられ何語調を强めて青年技術者林君の死を痛惜して止まなかつた。

其夜は遺骨の前で御通夜をなし翌四日午後五時遺骨と共に植田を立つことにした。

菊多灣の海邊のから風は絕え間なく松籟の音も一しほ冴えて亡き友を葬送する雅樂に似て愁然。時折聞える夜業の人の聲と機械のきしる音のみ。林君は今百万億土の何のあたりを彷徨して居るだらうか。噫ゝ林君はもう二度と歸らざる過去帳の人となつて益々離れて行かねばならぬのだ。

最後に此度の事件に對して何かと御配慮を賜つた工場長始め各社員の方々及何かと御親切に御面倒を見て下すつた同窓の瀧澤、大塚、山田の諸君に對し同級生の一員として厚く感謝の意を表する次第である。

林君を憶ふ

忠郎

私には中學時代より小林六之助君と云ふ唯一の仲宜しがあつた。竹馬の友と云ふのはこんな人の事かと常に思つて居つた。私の事に就いては甘いも辛いも知り盡くしてゐた。此の小林君が臺中の政務課長より轉じて間もなく昨年七月基隆稅關稅部長の要職にある際、不慮の災厄で亡くなられて以來隨分私は氣を腐らして居つた。兄弟以上に思ひ合つた仲丈に彼の生活に就いては公私共胴察することが出來た。隨つて彼に對する種々の方面より見た隨筆は拙文ながら拵へることが出來た。然し林君の場合になるとそうは行かぬ。林君との交友は單に同級生と云ふ丈で義務的のもの以上にはなり得なかつた。それは性格も境遇も異なり又趣味の相違が自からそうさせたと思ふ。古谷教授や須田先輩のそれと比較しては非常に程度も淺いのだ。從つて林君の憶ひ出を書くには殆んど白紙で行かねばならぬ。强ひて之を求め其の適格なるやはさておき林君の二、三の事どもを認めて君の靈を慰むる事とする。

林君は總じて理智的の人で磊落の性格などは寸分も見當らなかつた。それは家庭的には幼少の頃より複雜なつた境遇にたのと天性彼の推理的頭腦の發達に由來するものと思はれる。斯うした人の常として社交的には兎角疎んぜられた形であつた。寧ろ讀書三昧に入り研究的にあつて大成をなす樣な性格を多分に持つた人と思はれる。昭和人絹入りの前（昭和九年九月頃）倉澤教授より鹿兒島の染學校へ推薦せられたことがあつた。母校を卒へて母校に育つたのみで社會を知らない彼には最も好機として隨分氣が動いたものだ。其後本校に於いて金子教授指導の下に人絹製造に先鞭をつけ後輩指導にあたつた。幾何ならずして昭和人絹入をした。其の決定の折の林君の狂喜の有樣は今もありの儘を想起するに容易である。年來の希望を達したのだもの。然し自分は獨り憂へた。君の性格体質を以つてしては創業の會社は餘りにも過重ではないか。苦言を呈するには君の熱が餘りに上り過ぎて居り又それ丈の親交もなかつた。川崎の試驗部へ移つてから後も獨り君の大過なきを蔭ながら祈つた。去る晦日に疎く今から見ればそれも頼りないかこち方に過ぎなかつた。錦工場運轉開始に當つて彼の會社に於ける地位收入は同年輩の羨望であつたが、裏面に於ける頭腦の苦痛は相當大であつたらしい。殉職前の彼は輕い神經衰弱の氣味もあつたとか。兎もあれ待つ春を前にあだし櫻の顏も見ず幾春秋を一と時におほはせていとしくも果敢なく焦土と化して錦の土地の守と鎮つて終つた。

K氏が本場より資本をかけて仕込んで來たタンゴやワルツのダンスを見て習はんと蔭ではもがいて居つたが如何にするも身につかないぎごちな型になつて終ふあたりは林君の性格を如實に物語るものだつた。

昭和九年秋北陸地方へ人絹工業視察と銘打つて始めての出張された折、某市の旅舍に旅裝を解いて一泊せる翌朝、洋服の入つた大事のトランクの盜難を知つた。溫順な彼は宿の主人も責めず默々として不足品を取揃へて次の旅をつゞけた由。私の如きならば全額辨濟强要も敢へて辭せざる劍幕で一芝居をやらかすのに未だ耳新しい逸事として殘された。

林君は日頃推理的座敗競技は何事も玄人肌の手際を見せた。碁、將棋、麻雀とあらゆる方面へ手を延した。之等はお祖父さんの薫陶を受けたのだ。中にも碁は有段の域に進んで居つた由。而も斯うした競技の正確さ加減は驚く他ない。對座せるものは一度は恐をなすとは通り言葉だ。今は主のない盤のみが獨り林君の殉職を嘆き永久に歸らざる主人に愛着の眼を注いで居る。

筆者は最近新しく上田市新田に家を持つた。其の裏庭は只の六坪餘りだ。蘆花に云ふ『庭挾きも碧空を仰ぎ歩して永遠を思ふに足る』の庭である。その片隅に中古株の野梅の木がある。一時の盛りを過ぎバラ〳〵と白き花瓣が散つて昨日來の雨で地上にうたれた其の姿は見る蔭もない。然し之とても『永遠を思ふ』ことはなく何かしら考へさせられる。私共の級友は故田子君を失ひ、只の六名であつた。それが殆んど皆異つた方向へ向つて進んだ。其中唯一の工場人は巡り巡つて林君となつた。而も地位も收入も亦最近の環境も吾等の仲間の花形であつた感がある。其の君が一朝にして人絹の殿堂よりあへなく拋り捨てられた。君の歩いたコースは短期間であつた。而も過去は逆境であつた。それ丈考へさせられる點は多い。既に工場は復興の懸案も解決し君が御令閨樣には男々しくもたつた一人の御遺女のためには万難を排して最善の方法を考究中である。願くは安けく成佛して菩提の下より遺族の將來と年來君が事業上の宿望達成を護られんことを。

林太郎君を惜しむ

碓氷　茂

「林太郎君が殉職したさうだ。東京朝日の夕刊に出てゐたゾ」と友人からおしへられて三月二十九日の夕刊を調べて見たらその通り、僕は驚いた。

○

僕等のクラスは七人きりだつた。おそらく最も少ないクラスメートを持つたのが僕等だつたらう。そのうち田子君が數年前に他界して、六人になつて了つた。ところがその六人の中から、又一人林君をさらはれて了つて、僕等は五人きりになつて了つた。この意味で非常な淋しさを感じてゐる次第である。

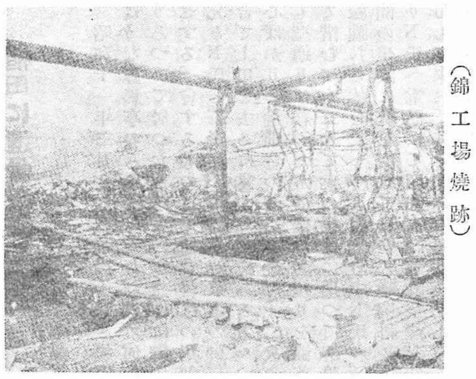
○

上田卒業後僕の航路は全く無軌道で、ワキ道ばかり歩いてゐた。そんな關係でもあつたらうが、どうもクラスメートとは概して疎遠勝ちであつた。それはクラスメートの總てに對してさうであつた。從つて學校卒業後林君ともミッシリ話したりする機會はなかつた。その頃君は學校の化學實驗室で勉强してゐたが、以上のやうな次第で君をお訪ねする機會も餘り持たなかつたわけである。

○

そのうちに同君から昭和人絹へ這入られた通知が來た。それは確か川崎市からだつたと思ふ。間もなく又君から通知があつた。今度遭難された錦工場からである。さうしてそれが林君から受け取つた最後の通信となつて了つたわけである。

○



（錦工場燒跡）

林君は眞面目な人だつた。林君を思ひ出すたびにその姿と共に浮んで來るのはこの「眞面目」である。そしてその責任感の强いことである。さうした林君の眞面目と責任感とが勿論今度の結果となつて現れたのでもある。何れにせよ今日のやうな「世相」の中に於て君のやうに責任感の强い人はメッタに發見し得るものではない。

○

林君は又決してうはべの人ではなかつた。決して表面を飾る人ではなかつた。人が見てゐやうがゐまいが、君ば總て責任を以て忠實に仕事をしてゐた。それは林ならでは發見出來ない尊さである。

○

さうした立派な林君のやうな學友を失つたことは惜んでも惜み切れない悲しさである。

墓參の歸途車中にて　林君を憶ふ

濱　香三

今碓氷を走つてゐる。僕は新京に歸るのである。僕は上田に行つて來た。林君の新しい墓標の前に御參りした。而して林君の遺族と始めて御會ひした。林君の御遺族、可愛い四ッになる孃や、既に父なき淋しい孃や、あゝ僕は今日此頃級友林太郎君の奥樣、御令孃と御會ひして此の方々を御遺族と呼ばなければならないとは思ひも掛けざりしことである。御遺族何んと云ふ淋しい言葉であらう。

社葬（社長弔詞）

林君は言葉少ない眞面目な人であつた。其の一生を他人の爲めに捧げ通した。上田の母校には長い間勤めたけれど其れは殆んど自分の研究ではなく他人の研究を佐ける助手としてである。林君は上田時代には餘り同窓生等とも格別の交際もすることなく、忠實な助手として一生懸命働いたのである。而して吾々凡人が考へれば長い年月助手として働いた。林君は其の爲めに相當報いられるであらうと思つたけれど林君は其の爲めには餘り多くの何物をも得なかつた樣である。然し林君は其れに對して何んの不平も云はなかつた。斯した人格者林君は昭和人絹の高級技師として始めて社會に出たのである。僕は殊更林君が人絹入をした時を以て、林君は社會に出たのであると云ひ度い。

林君の社會生活はほんとに短かつた。林君が昭和人絹に入つた時は僕はどんなに喜んだか。之れで僕等の級友全部が社會に出たのである。そうして長い間自重に自重を重ねた林君が一度社會に出るや僕等の級友の內では林君が先頭に立つて吳れたのである。僕等級友は林君の將來に多くの期待を持ち、僕等をリードして吳れることを信じたのである。然し之等の全部は昭和十一年三月二十八日を以て放棄せねばならない運命となつたのである。

林君に關する思出は次から次へと續く。今其の一部でも書き度い。然し旅行中の僕には其の時間がない。又僕の考へる全部を此處に書く必要もあるまい。僕は今は林君の奥樣と四ッになる御孃さんが丈夫で幸福な一生を送つて下さることのみを念じて居る。又其の爲めに必要であり、吾々の出來得ることあらば何事でもやり度い。

林君の孃やよ、丈夫で大きくなつて下さい。滿洲の小父さんは其れを神樣に祈つて居ります。（桐生にて投函す）

會員動靜

（五月五日現在）

岩岡末彦（舊職）（勤）津市津興、三重縣蠶業試驗場兼津市津興、三重縣繭檢定所（住）津市乙部町觀音通四ノ七四七

花岡作彌（蠶一）（勤）愛媛縣新居郡西條町、愛媛縣立新居農業學校（住）愛媛縣新居郡泉川村

古山宗八（蠶二）（住）山形縣置賜郡高畠町

寺島親雄（蠶三）（勤）福岡市外箱崎町、福岡縣蠶業取締所（住）勤務先構内官舍

田口博輔（選蠶四）（勤）群馬縣群馬郡元總社村、群馬社（住）前橋市曲輪町二八

柏倉豊吉（蠶九）（勤）ナシ（住）山形縣東村山郡豊田村大字岡一

村田孝男（蠶一三）（勤）山口縣吉敷郡大內村、山口縣農事試驗場苗虫部（住）山口市外大內村御堀西ノ谷　小林貞雄方

小林憲政（選蠶三）（勤）千葉縣成東町成東驛前、昭榮製絲出張所（訂正）

加々井精喜（選蠶三）（勤）宇都宮市、東組合製絲聯合會栃木社（住）宇都宮市西原町下河原一八九

宮崎貞亮（蠶一四）（勤）徳島縣名西郡石井町、徳島縣蠶業取締所石井支所（住）石井町大字石井三一七番地ノ一

佐村和夫（蠶一四）（勤）山口縣熊毛郡鹽田村、三ケ村青年學校（住）山口縣熊毛郡鹽田村周地

鷲谷正男（蠶一四）（勤）靜岡縣富士郡大宮町、靜岡縣蠶業取締所大宮支所（住）大宮町乙女町

片山次男（蠶一五）（勤）岐阜市長住町三丁目、東亞蠶絲商會（住）岐阜市吉津町二ノ一四

宮本清松（蠶一六）（勤）埴科郡坂城町、埴南農蠶學校（住）埴科郡坂城町日名澤

中澤喜雄（蠶一八）（勤）下伊那郡鼎村、下伊那農學校（住）下伊那郡鼎村下茶屋町

竹内直人（蠶一八）（勤）石川縣珠洲郡飯田町、石川縣蠶業取締所飯田支所

杷杷木瀧雄（蠶一九）（勤）東京市杉並區高圓寺、農林省蠶業試驗場（住）東京市杉並區和田本町八六九　峰村松尾方

池内眞吾（蠶一九）（勤）埴科郡屋代町、屋代高等女學校

工藤實司（蠶一九）（勤）ナシ（住）小縣郡鹽尻村秋和

鷹本薫一郎（蠶一九）（勤）愛媛縣新居郡西條町、愛媛縣蠶業取締所新居支所

辻本勇（蠶一九）（勤）松阪市殿町、三重縣蠶業取締所松阪支所

平岡英司（蠶二一）（勤）長野市、長野縣蠶業取締所長野支所

牧島章吾（蠶二一）（勤）福島縣信夫郡飯坂町、農林省蠶業試驗場飯坂出張所（住）飯坂町馬場

池田俊郎（蠶二一）（勤）靜岡縣二俣町、靜岡縣蠶業取締所二俣支所（住）二俣町新町尾張屋旅館

水谷清（蠶二一）（勤）愛知縣布袋町、愛知縣蠶業試驗場

鈴木正一郎（蠶二三）（勤）靜岡市、靜岡縣蠶業取締所靜岡支所（住）靜岡市田町一ノ七九

酒匂景雄（蠶二二）（勤）南佐久郡野澤町、長野縣蠶業取締所野澤支所

林部源三郎（絲一）（勤）東京市日本橋區室町四丁目近三ビル、帝國人造絹絲株式會社東京出張所

高尾歳次（絲二）（勤）埼玉縣兒玉郡若泉村字渡瀨、原富岡製絲所渡瀨分工場（住）勤務先＝同ジ

高木三治（絲三）（勤）從前通リ（住）横濱市鶴見區東寺尾八八七東台小學校西

水谷鄕一（絲三）（勤）ナシ（住）松本市神田町九七六

水野健吉（絲三）（勤）横濱市中區日本大通、三井物產株式會社横濱支店

西孝重（絲八）（勤）松江市、島根縣廳經濟部

福島鋼治郎（絲一二）（勤）福岡市福岡縣廳蠶絲課（住）福岡市百道縣營住宅イ四三號

有松利一郎（絲一四）（勤）群馬縣北甘樂郡富岡町、原富岡製絲所

須永茂（絲一八）（勤）ナシ（住）桐生市西久方町菊地敬助方

副田好美（絲二一）（勤）ナシ（住）福岡市下長尾町八四一

征矢克郎（絲二一）（勤）ナシ（住）上伊那郡南箕輪村

熊谷俊三（絲二一）（改姓）永田ト改姓（勤）松本市、片倉松本工場

崎山正克（絲二二）（勤）和歌山市加納、和歌山縣繭檢定所

小松忠一郎（紡三）（勤）從前通リ（住）上田市新田町二二四九

櫻井隆夫（紡四）（勤）本校蠶絲化學教室（住）上田市前田町

阿久澤孝典（紡四）（勤）ナシ（住）群馬縣勢多郡粕川村稻里

草野弘（紡九）（勤）新潟縣中蒲原郡五泉町、五泉實業學校

小林忠十郎（紡一〇）（横）濱市中區辨天通三丁目、原合名會社輸出部

柳澤信義（紡一〇）（勤）濱松市馬込町、名古屋輸出絹織物檢查所濱松支所

田中市江（教三）（勤）埴科郡埴生村、有明社

深町いつ（教三）（勤）ナシ（住）小縣郡神科村字山口

山崎みつい（教三）（勤）ナシ（住）小縣郡鹽尻村下鹽尻

和田りん（教三）（勤）ナシ（住）小縣郡中鹽田村小島

新會員就職先

五月五日現在

養蠶科 二三回（昭和十一年、三三名）

出野　正雄　京都　（勤）新京、滿洲國實業部農務司農產科（住）新京惠民路代用官舍乙二三號　横山鑑方
井口　澄男　長野　（勤）岐阜縣惠那郡大井町、岐阜縣蠶業試驗場大井支場
奥村　忠治　富山　（勤）東京府立川町、東京府蠶業取締所立川支所（住）東京市芝區白金三光町三五九
小野　忠　長野　（勤）石川縣鳳至郡輪島町、石川縣蠶業取締所輪島支所
川中　貞次　兵庫　（勤）兵庫縣城崎郡日高町、兵庫縣蠶業試驗場（住）勤務先場內
香山　護　岡山　（勤）本校養蠶科
北原　至　長野　（勤）前橋市前代田、群馬縣蠶業試驗場
近藤　二郎　岡山　（勤）朝鮮水原、朝鮮總督府農事試驗場蠶絲部
坂本　勝三　長野　（勤）金澤市、石川縣蠶業取締所金澤支所（住）金澤市松下町五　山浦方
清水　傳　長野　（勤）下伊那郡松尾村、喬木館養蠶部
鈴木　中　神奈川　（勤）岐阜縣大野郡大名田町、高山蠶業試驗場
關　博夫　長野　（勤）京都府綾部町、郡是製絲株式會社（住）勤務先寮內
關　熙　長野　（勤）本校養蠶科
竹內　好武　長野　（勤）東京市杉並區高圓寺、農林省蠶業試驗場
高橋　悟　廣島　（勤）京都府綾部町、新綾部製絲株式會社
載　元亨　中華　（勤）東京市瀧野川西ヶ原、東京高等蠶絲學校（住）東京市豊島區駒込六ノ六四六　櫻井方
田澤　輝雄　長野　（勤）上田市、長野縣蠶業取締所上田支所
西川　晋　東京　（勤）沼津市高島町、昭榮製絲沼津工場
西澤　政人　長野　（勤）沼津市高島町、昭榮製絲沼津工場
羽藤　泉　愛媛　（勤）京都府綾部町、新綾部製絲株式會社
丸川　貞雄　山形　（住）山形縣西置賜郡蠶桑村横田尻
宮城　時久　長野　（勤）長野市岡田、長野縣蠶業試驗場
母袋　忠右衛門　長野　（自營）小縣郡鹽尻村
山內　一次　新潟　（勤）靜岡市田町、靜岡縣蠶業試驗場
山村　泰三　東京　（勤）松本市蠶玉町、片倉普及團
横澤　正雄　長野　（勤）長野市岡田、長野縣蠶業試驗場
横山　良毅　長野　（勤）諏訪郡中洲、中洲青年學校
吉田　信伍　新潟　（勤）西筑摩郡福島町、長野縣蠶業取締所福島支所
渡邊　善次　長野　（勤）松本市蠶玉町、片倉普及團

製絲科 二三回（昭和十一年、二六名）

青木　善次　大阪　（住）大阪市住吉區駒川町五ノ一三
秋山　實　長野　（勤）諏訪郡湖南村、東英社
伊藤　茂　山口　（住）山口縣都濃郡久保村大字河內四二三　岩根方
稻垣　文一郎　愛知　（勤）豊橋市花田町、愛知縣製絲試驗場
岩田　久太夫　三重　（勤）東京市杉並區高圓寺、農林省蠶業試驗場
上條　之有　長野　（住）南安曇郡梓村五八九
江端　爲夫　靜岡　（住）福岡市馬玉九〇五
神崎　關一　福岡　（住）福岡縣糟屋郡箱崎町二股瀨
桑木　正義　岡山　（勤）東京府立川町、東京府繭檢定所
小菅　貞三　群馬　（住）群馬縣群馬郡明治村北下
末次　房一　佐賀　（勤）中津市、豊中製絲株式會社
鈴木　武夫　福島　（勤）福島市太田町、昭榮製絲株式會社福島工場
高原　稔　福岡　（勤）前橋市岩神町、日本人造纖維株式會社
寺崎　喜美　栃木　（住）東京市澁谷區神泉町二四
星野　智　愛知　（勤）名古屋市南區熱田東町東起、服部紡績株式會社熱田工場工務部
牧　式太郎　大分　（勤）大分市辨天島、日本人造羊毛株式會社
宮坂　三郎　長野　（勤）岡谷市、片倉平野製絲場
宮島　四郎　長野　（住）下伊那郡市田村四七五
宮原　英俊　長野　（勤）京都府綾部町、郡是製絲株式會社
山浦　克巳　長野　（住）小縣郡川邊村一七二
山木　辰雄　東京　（住）盛岡市、岩手縣繭絲販賣組合聯合會盛岡工場
山口　悠紀男　長野　（勤）前橋市岩神町、日本人造纖維株式會社
和田　幸一　長野　（勤）東京市麴町區大手町、農林省蠶絲局繭絲課

絹紡織科 一五回（昭和十一年、一二名）

渡邊　綱男　長野　（勤）諏訪郡川岸村、片倉丸一製絲所
淺野　佐門　兵庫　（勤）一宮市外馬引、愛知縣毛織物檢査所一宮支所（住）一宮市長良町二ノ二七　佐藤仙次郎方
天野　彰　靜岡　（勤）富山縣射水郡大門町、吳羽紡績大門工場
上田　正三　大分　（勤）今治市、長崎紡織今治工場（住）今治市南大門通横井テイ方
川久保　保元　長野　（勤）一宮市外馬引、愛知縣毛織物檢査所一宮支所
沓掛　祥平　長野　（勤）京都市左京區高野上開町、鐘紡京都支店
小鮒　啓助　群馬　（勤）愛知縣海部郡津島町、愛知縣毛織物檢査所津島支所
菅尾　源治　大阪　（勤）京都府綾部町、郡是製絲株式會社調査課
高木　信雄　長野　（勤）愛知縣海部郡津島町、愛知縣毛織物檢査所津島支所
土屋　勉　長野　（勤）前橋市岩神町、日本人造纖維株式會社（住）前橋市向町五　八第二紫明寮
中川　正　岐阜　（勤）名古屋市西區北押切天神山、愛知縣毛織物檢査所名古屋支所
藤松　利八　福岡　（勤）東京市日本橋區蠣殼町、東京モスリン紡織株式會社營業部
門田　勇　廣島　（勤）東京市荒川區三河島町二丁目、日本製絨株式會社

製絲教婦養成科 四回　昭和十一年、一五名

赤羽　みち子　長野　（住）福島縣伊達郡長岡村、多勢丸多製絲長岡工場
大瀧　けさい　長野　（勤）東京府西多摩郡青梅町、東京府是製絲株式會社
掛川　志づ　長野　（勤）福岡市太田町、昭榮製絲福岡工場
金澤　貞子　長野　（勤）津市津興、三重縣繭檢定所
龜井　俊子　山形　（勤）東京市杉並區高圓寺、農林省蠶業試驗場
木下　とみ江　長野　（住）小縣郡鹽尻村大字秋和七六八
小宮山　かめじ　長野　（住）上田市松尾町
小宮山　順　長野　（勤）小縣郡縣村田中、田中製絲株式會社
榊原　弘子　長野　（勤）東京市杉並區高圓寺、農林省蠶業試驗場
關　美代子　東京　（勤）兵庫縣佐用郡三日月町、兵庫縣繭檢定所三日月支所
中塚　ミツ子　富山　（住）金澤市佐佳枝町、石川縣生絲檢査所
仲藤　潮　長野　（勤）栃木縣小山町、昭榮製絲小山試驗場
林　正枝　長野　（勤）津市津興、三重縣繭檢定所
平田　時江　長野　（勤）岩手縣一ノ關町、昭榮製絲一ノ關工場
三戸部　滿　長野　（勤）埼玉縣北足立郡大宮町、片倉大宮試驗所

時報返戻

左記會員宛の時報は返戻せられたり最寄の向は御通知願度し。

	屆先	返戻理由
佐藤　磐（蠶一七）	福岡市筑紫郡二日市町、昭榮製絲二日市工場	不在
蠏江　優（絲一七）	東京市日本橋區茅場町一丁目七ノ六	轉居先不明
富岡　正男（絲一九）	東京市杉並區天沼三ノ六一八	仝
吉津　柏（紡一六）	大阪市北區川崎町六、三光工作所	仝
清水　雪子（舊教八）	長野市北石堂町二三八	仝
味澤　泰造（絲五）	東京市下谷區谷中町五番地、生絲之國社東京營業所	不當事

會費領收（五月五日現在）

昭和十年度通常會費納入者

福富　繁（蠶七）　平尾　孝平（蠶十九）
森西　康充（絲十二）

未納會費納入者

金參拾壹圓也　藤井　周藏（蠶六）
金五圓也
橋本　廣（蠶六）　石川　健丸（絲六）

昭和十一年度通常會費納入者
（○印は蠶絲學雜誌代共）

○横澤　正雄（蠶廿三）○奥村　忠治（蠶廿三）
○丸川　貞雄（蠶廿三）○山內　一次（蠶廿三）
天野　彰（紡十五）　上田　正三（紡十五）
川久保　元（紡十五）　高木　信雄（紡十五）
小鮒　啓助（紡十五）　門田　勇（紡十五）

終身會費完納者

藤井　周藏（蠶六）　橋本　廣（蠶六）
稻垣　文一郎（絲廿三）　淺野　佐門（紡十五）

入會金納入者

完納者
横澤　正雄（蠶廿三）　横山　良毅（蠶廿三）
羽藤　泉（蠶廿三）　山內　一次（蠶廿三）
久保田　不二夫（蠶廿三）　奥村　忠治（蠶廿三）
稻垣　文一郎（絲廿三）　伊藤　茂（絲廿三）
桑木　正義（絲廿三）　寺崎　善美（絲廿三）
岩田　久太夫（絲廿三）　青木　善次（絲廿三）
清水　健一（絲廿三）　宮原　英俊（絲廿三）
渡邊　綱男（絲廿三）　牧　式太郎（絲廿三）
沓掛　祥平（紡十五）
金拾圓也
秋山　實（絲廿三）　上條　之有（絲廿三）
鈴木　武夫（絲廿三）
金五圓也
池內　眞吾（蠶十九）　淺野　佐門（紡十五）
天野　彰（紡十五）　上田　正三（紡十五）
川久保　元（紡十五）　小鮒　啓助（紡十五）
門田　勇（紡十五）　土屋　勉（紡十五）

新任挨拶

春暖相催之候

學友同窓諸賢には御健祥にて斯界のため御活躍のこと丶存じます。

陳者不肖今度光輝ある上田蠶絲專門學校に講師として語學並に農業經濟學を講ずることに相成りました上は粉骨碎身斯學のため努力致す覺悟で御座いますれば學友諸彦におかれましては小生の微衷を諒させられ何卒御教導御後援下さいますやう御願申上げます。

昭和十一年五月

小泉　所

新任挨拶

拜啓　陽春之候各位愈々御多祥之段奉大賀候

陳者小生等母校養蠶科在學中は格別の御懇情を忝うし誠に難有奉深謝候　今回御蔭樣にて左記の如く母校に副手として勤務致す事と相成り候間今後倍舊の御指導御鞭撻賜度奉懇願候　先は乍略儀以紙上御挨拶迄申述度如斯御座候　敬具

昭和十一年五月

生理學教室　關　博夫
圃　場　香山　護

編輯室より

△先月號の本欄で來月號は必ず早く出すと誓ひ乍ら又遲らせてしまつて何んとも申譯が無い。懸命にやつてゐるのであるが色々な豫期しない仕事が生じて一日延びに延びてしまつた次第である。六月號は期日に間違無く出して汚名を雪ぎ度いと思つてゐる。

△先月號から約百名の新入會員を迎へ本紙發行部數一九五〇部となつた。それ丈編輯子の苦勞も增加した譯である。然し一面それ丈の讀者が增加したと思へば滿更でもない。新入會員には送先が判明し無かつたので四月號は送らなかつた。今月纏めて送る積りである。無斷で送らなかつたので照會して來た向も相當多かつた。此の點お詫び申上げる。

△今月は聊か原稿不足の感があつた。特に第一面に載せる樣な材料の無いには毎月閉口してゐる。で已むを得ず一面には感心しない記事も載せざるを得なくなる次第である。ポピュラーな斯業の研究や調査の御寄稿を切に希望する。

△同級生であるから云ふ譯では無いが、林太郎氏の殉職は現代稀に見る美談である。同氏は非常に地味な人で同窓生間の交際も少かつたからよく御存知で無い方も相當多いと思ふが五面から十面に記載しある弔慰文を御覽の上、同氏の死を出來る丈盛大にして下さらん事を懇請申上げる次第である。

△高原の春は短い。此の間迄炬燵にもぐつてゐたと思つたらもう日陰を漁つて歩くと云ふ暑さだ。木々は坊主から新綠、新綠から深綠とあわたゞしいテムポで變化しつゝある。樹木の多い母校はスツカリ綠りに包まれて何處に校舍があるか譯らない樣になつた。

投稿規定

一、內容は不問、平易なる學術研究會員消息に關する物は特に歡迎。取捨は當方に一任せられたい。編輯の都合に依り全部又は一部來月廻しとなる事がある。

一、原稿は特に豫め申込無き限り返戻致しません。

一、締切は毎月六日限、特に一月號は一日發行とする爲め二十日限とする。

一、原稿は開封し二錢切手（第四種百十瓦迄）を貼布して送附し通信文があつたら別に葉書等にて通知されるが得策である。

一、必ず原稿紙を使用し明瞭にお書き下さい。又句讀點を必ず施して一字分の間隔を措いて下さい。

一、匿名で掲載希望の場合も編輯部丈へは姓名をお明し下さい。然らざる時は遺憾乍ら掲載を見合せる場合があります。

一。圖面や寄せ書は一尺八寸×一尺三寸以內とし必ず白紙に墨書して下さい

一、原稿紙は御請求次第送附す。普通の原稿紙を使用する場合は一行十八字丈書込まれ度い。

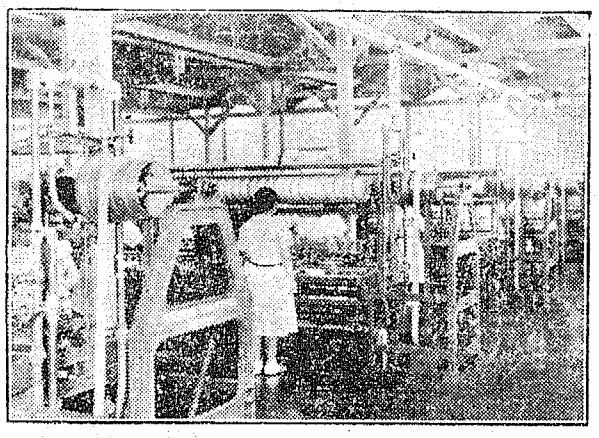
廣告規定

寸法／期間	一月	六月	一年
一頁	一三、〇〇円	六四、〇〇円	二六、〇〇円
1/2頁	七、五〇	四〇、〇〇	七〇、〇〇
1/4頁	四、五〇	三、〇〇	四〇、〇〇
1/8頁	二、五〇	二、〇〇	二〇、〇〇
1/16頁	一、五〇	七、五〇	一四、〇〇
1/25頁	一、〇〇	五、五〇	一〇、〇〇

但し本會員は七掛とす。

醫療藥品
化學藥品
理化學器械
寫眞材料
上田市海野町
河合藥品器械舗
電話二一七番
振替長野七八四番

大宗式
多條繰絲機
（リナ宗大ノ易貿出輸國我ハ絲生）



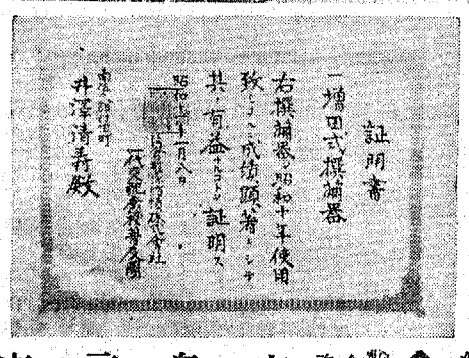
半沈沈繰兩用
大宗式蒸氣滲透對流煮繭機 專賣特許 實用新案

元賣販造製械機絲製諸式工群
平山製作所
群馬縣前橋市向町一〇五番地
電話一八五番　振替五七五四二番

特許二一七一六六三號
增田式撰繭機

各蠶試蠶業取締所推奬品

蠶種製造者ノ必備品



蠶蛆驅除界ノ革命機
選繭正確蠶蛆撲滅

本機ノ特徵
鑑別正確ニシテ殆ド百%選繭能率大ニシテ一時間七貫以上
晝夜、晴雨ヲ論ゼズ鑑別可能
軟化病斃死蛹モ選繭出來ル

蠶機絲商械
合資會社宮島商店
長野縣上田市
私書函十一號
電話長一一六番（田上）特一〇八一番

原蠶種
左記複式冷藏中
國蠶歐十六號
國蠶支十六號
國蠶日八號
國蠶支十七號
國蠶支一〇六號
佛純白繭
分離白一號
昭和十一年製
普通蠶種
秋×國蠶日二二號　分離白一號
國蠶支一〇七號　×國蠶支一〇七號
春白×國蠶歐十九號　國蠶歐十九號
國蠶支十七號×龍仙
黃×國蠶歐十六號
國蠶支一〇七號
廣島縣御調郡奧村綾目八五
蠶種業　小川保
（電報別便不要）振替（廣島）二四六番（大阪）三〇七六三番